岐阜大学留学生センター・フォーラム

岐阜地域の国際化戦略

―大学と自治体の連携の可能性―

2009.2.27.fri.
14:00-16:30

報告書

平成２１年２月２７日（金）14：00 ～ 16：30
主催　岐阜大学留学生センター
岐阜大学　医学部記念会館２階ホール

岐阜大学留学生センター・フォーラム

岐阜地域の国際化戦略
ー大学と自治体の連携の可能性ー

主 催　岐阜大学留学生センター

日 時　平成21年２月27日（金）14：00 ～ 16：30

会 場　岐阜大学　医学部記念会館２階ホール（多目的会議室）

趣 旨

現在、世界各国が将来を見据えて、留学生交流（受入・派遣）という「国際化」を推進しています。わが国でも「留学生30万人計画」が策定され、交流推進への大きな動きが本格化しつつあります。

岐阜地域でも留学生が、卒業後も地域社会に定住するなか、大学と大学、大学と地域の連携の重要性は増しています。しかしながら、相互に情報を交換する機会は皆無です。今回、県内の大学・自治体が、より良い岐阜地域の国際化に向けて、どのように連携して行くか、その可能性を検討します。

プログラム

13：00 ～ 14：00	受付
14：00 ～ 14：10	開会の挨拶　岐阜大学理事（教学担当）副学長　古田善伯
14：10 ～ 14：30	「岐阜から世界へ－岐阜市立女子短期大学の国際交流活動－」 須永　敬氏（岐阜市立女子短期大学　准教授）
14：30 ～ 14：50	「岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化」 加藤由紀子氏（岐阜経済大学　准教授）
14：50 ～ 15：10	「留学生教育と地域－岐阜大学サマースクールの試み－」 森田晃一氏　（岐阜大学留学生センター　教授）
15：10 ～ 15：20	休憩
15：20 ～ 15：40	「地域と大学との連携を目指して」 新田　豊氏（岐阜県　総合企画部国際課）
15：40 ～ 16：00	「岐阜市の国際交流と多文化共生」 山本哲也氏（岐阜市　市民参画部国際課）
16：00 ～ 16：20	「各務原国際協会のこれまでの取り組みと今後の課題」 奥村和彦氏（各務原市　産業部観光交流課）
16：20 ～ 16：30	質疑応答
16：30	閉会の挨拶　岐阜大学留学生センター長　小林浩二

CONTENTS

開会の挨拶
岐阜大学理事（教学担当）副学長　古田善伯
3

発　表（大学）
「岐阜から世界へ－岐阜市立女子短期大学の国際交流活動－」
岐阜市立女子短期大学国際文化学科　須永 敬
4

「岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化」
岐阜経済大学経営学部　加藤由紀子
13

「留学生教育と地域－岐阜大学サマースクールの試み－」
岐阜大学留学生センター　森田晃一
19

発　表（自治体）
「地域と大学との連携を目指して」
岐阜県総合企画部国際課　新田 豊
25

「岐阜市の国際交流と多文化共生」
岐阜市市民参画部国際課　山本哲也
33

「各務原国際協会のこれまでの取り組みと今後の課題」
各務原市産業部観光交流課　奥村和彦
41

質疑応答
49

閉会の挨拶
岐阜大学留学生センター長　小林浩二
51

開会の挨拶

岐阜大学　教学担当理事　副学長　　古　田　善　伯

こんにちは。副学長の古田でございます。

私は副学長になって約１年たつのですが、その間、留学生の関係の仕事をしております。ここにあります留学生センターがいろいろ企画を立てて、いろんなことをやっておられるのを聞いて、それで留学生さんたちは大分助かっているのではないかと思っております。

国の施策としましては、留学生10万人計画というのが始まりまして、何とかそれを達成した途端に、今度は留学生30万人計画という膨大な人数の計画を立てております。それが今進んでおるわけでございますが、これに対する対応がこれから進められてくると思いますが、そういう中で、岐阜県、岐阜大学としてどう取り組むかというところがこれから大きな課題になってまいります。

つい先日の会議で、岐阜県全体でどのくらいの留学生さんがおられるかということを知ったのですが、昨年の５月の段階では1,343名の留学生さんがおられるということです。そのうち、本学は大体400名弱でございまして、その大半、九十何％がアジア系の留学生さんでございます。そういったことを前提に置きながら考えていく必要があるかなと思っております。

そういう関係で、つい最近、今、円が非常に高くて、仕送りなど非常に困っておられるということで、留学生の一部の方に、円高に苦しんでおられるだろうということで１人５万円をお配りするということをやりました。それで足りるかどうか、全然足らんと思うのですけれども、少しでも援助できる、そういう体制を今考えておるところでございます。

それから、今、国立大学法人の場合は、次期の中期目標、中期計画を立てることになっておりまして、その中に本学は国際化というのを強くうたおうということで、その取り組みについて今検討しているところでございます。

その辺も含めて、今後、特に留学生センターが留学生を受け入れる体制、それをどうするかということも含めて、今検討しているところでございます。

本学の特徴なのですけれども、私が見た限りは、留学生さんは、センターを介して、岐阜県の地域と非常に密着した交流をされているということでございます。その辺が非常に特徴的かなと思います。こういったことをさらに拡大していって、今度は大学間、それから地域、それから日本中、いろんなところで活躍できるようになればなあと思っております。

特に本学の場合、サマースクールというのを昔からやっております。これは、ユニークな取り組みでございまして、地域へ実際行って、そこで皆さんと交流するということで、これは全国でも有名なところでございます。そういったことをさらに発展していければと思っております。

きょうは、大学から３名の先生、それから自治体から３名の講師さんをお招きしまして、それぞれこの地域の中での留学生のあり方などについて、連携の仕方について、議論をされるわけですが、きょうのフォーラムが本当に実りあるものになることを願っております。貴重な意見をお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

以上、簡単ですが、私のあいさつといたします。（拍手）

発表（大学）

岐阜から世界へ

―岐阜市立女子短期大学の国際交流活動―

岐阜市立女子短期大学国際文化学科　准教授　**須　永　　敬**

【司　会】 須永敬先生は、神奈川大学大学院で歴史民俗資料学を学ばれた後、韓国の翰林大学の客員講師、それから国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント、信州大学特別研究員等を歴任され、現在は岐阜市立女子短期大学国際文化学科の准教授として、国際交流活動にも携わっておられます。

本日は、「岐阜から世界へ―岐阜市立女子短期大学の国際交流活動―」と題して、大学の取り組みを発表していただきます。では、須永先生、よろしくお願いいたします。

****

ただいまご紹介いただきました岐阜市立女子短期大学の須永と申します。本日は、「岐阜から世界へ」という非常に大きなタイトルでお話をさせていただくことになります。

今日はそれぞれの先生方からいろいろなお話があると思うんですが、この報告では岐阜の学生たちをどうやって世界に研修という形で送り出しているか、その点のご紹介を中心にお話をさせていただければと存じます。どうかよろしくお願いします。

それでは、報告を始めさせていただきます。

国際交流活動の概要

「岐阜から世界へ」ということでお話しさせていただきますが、まず国際交流活動の概要についてお話をさせていただきたいと思います。

岐阜市立女子短期大学では国際学術交流協定校がありまして、6校の大学・専門学校と協定を結んでおります。上から時計回りに、ブラックヒルズ州立大学、トマス・モア大学。これはいずれもアメリカの姉妹校になります。また、オーストリアのヘッツェンドルフ服飾専門学校、イタリアのポリモーダ専門学校、中国の浙江工業大学、韓国の威徳大学校。以上の6つの大学・専門学校と交流協定を結んでおります。

また、岐阜市立女子短期大学―以下、岐女短と略称させていただきます―岐女短の方では、岐阜市立ということもありまして、岐阜市の姉妹都市・友好都市にある大学とこのような交流協定を結んでいるところに特徴があります。つまり岐阜市の国際交流活動とタイアップするような形で、本学の国際交流活動を展開しているのです。

留学生の受け入れ

次に、留学生の受け入れについてなんですけれども、これがちょっと調べてみたところ、2000年、つまり、一日市場（ひといちば）の新しいキャンパスに移ってから2008年までの9年間で留学生がたったの3人です。これは次の岐阜経済大学のご発表だとか、岐阜大学の事例と比べると圧倒的に少ない数なわけですね。なぜかというと、岐女短は短期大学なんですね。短期大学というのは、世界でも珍しい学制で、海外、例えば中国から岐女短に留学して、そのまま国に帰ったとしても、専門学校卒のような扱いになってしまう場合があるわけです。韓国なんかでもそうなんですけれども、このような理由から、海外から短大に留学してくるメリットというのは非常に少なくなっております。現在、全国の国公立短期大学に留学している留学生を全員集めてきてもたったの7人しかいません。そのうちの貴重な1名が岐女短に在学しているのですが、留学生30万人計画という掛け声があるにもかかわらず、短期大学というのは留学生の受け入れにはあまり向いていないところがあるのかなと

思います。

また、こういった状況ですので、現在岐女短には留学生受け入れ部局は存在していません。このことも今後の課題になってくるところだと思います。また、留学生にせっかく入学してもらっても、就職が大変なのです。企業でも、最近では四大卒しか採らないと言ってくるところがあるんですけれども、大卒の留学生を入れるという企業はあっても、短大を出た留学生に門戸を開いているところはほとんどないのが現状です。そういう意味では、岐女短に留学してきても、就職先がないので結局また中国に帰ってしまうという事例があります。また、運よく四大に編入していく学生もいますけれども、そのときも、日本人と全く同じ編入試験を受けなければいけない。短大への留学生にはこういったデメリットがあるのです。これが現在の岐女短の置かれた状況といえます。

また、岐女短では短期訪問学生の受入もしています。これは国際文化学科という学科の活動で、姉妹校のブラックヒルズ州立大学から、教員、学生がほぼ毎年数名やってまいります。向こうからやってきた教員と学生を、国際文化学科の教員と、学生の団体である国際交流クラブが受け入れを企画、担当しています。韓国や中国の姉妹校からもやはり岐阜に行きたいという声はあるんですけれども、残念ながら、岐女短には寮であるとか、宿泊施設がありませんので、受け入れがなかなか難しいのです。岐阜のホテルに泊まってくださいとなると、ちょっとお金がないということになりますので、話は毎年のように出るんですが、宿泊施設がないということで、結局申し出をお断りしているというのが現状です。

海外研修の実施

また、岐女短では毎年海外研修を実施しています。皆さんも記憶に新しいと思うんですが、今から半年ほど前に世界遺産への落書き問題というのが起こって、そのイメージが強いかと思いますが、現在、岐女短では、四つある学科のうちの３学科（英語英文・国際文化・生活デザイン）で海外研修を実施しています。うち英語英文学科と国際文化学科は海外研修に参加すれば単位がもらえるようになっています。また、全研修には１名から２名の専任教員が引率担当者として参加をしております。

さて、ここで2000年度から本年度までの海外研修参加者数をご覧いただきたいのですが、これが驚くべき人数なのです。岐女短は、１学年の定員が約240人、全学で約500名程と、ちょっとした高校よりも小さい短期大学なんですけれども、９年間の海外研修参加者数―たとえば2000年は、アメリカ19名、韓国12名、ヨーロッパ41名の計72名となります―を積算していきますと、この９年間で何と702人が海外に行っているということになります。例えば今年度の場合、113名が海外研修に参加しているわけですね。これは、海外研修を実施している三つの学科の人数で割りますと、約３名に１人が海外研修に参加しているという数字になります。このように、岐女短では2000年から2008年までの９年間で702名もの学生を世界に、ちょっと大げさですけど、海外に送り出しているのです。

韓国・中国研修

さて、今回は海外研修の実例についてちょっと紹介させていただきたいと思いますが、国際文化学科では中国研修と韓国研修を実施しております。この両研修は私が担当しているので、それを中心にご紹介させていただきたいと思います。

まず、研修の概要ですが、研修期間はいずれも８日間、約１週間ですね。この研修に参加すると１単位がもらえます。また、事前説明会を３回実施しまして、ここには業者も一緒に参加してもらって、旅行上の諸注意を話してもらいます。現地で実施する研修内容は、基本的には午前中は語学講座―受け入れ校の教員が、中国であれば中国語、韓国であれば韓国語の講座を行います―、午後は現地学生との交流活動が中心になっています。

また、本研修の特徴として、ホームステイと組み合わせて行うフィールドワークというのが

あります。後ほどその様子をスライドで見ていただきますけれども、このフィールドワークというのが非常にユニークな試みになっています。

また、フィールドトリップというのは主に文化史跡の見学です。このような企画を織り込んで研修を実施しています。

岐女短の国際交流協定校ですが、韓国は威徳大学校、中国の方が浙江工業大学です。いずれも４年制の総合大学です。浙江工業大学と聞くと工業科の単科大学のようなイメージがあるかもしれませんが、実は総合大学です。浙江省で第２位の大学ですけれども、こういった学校と協定を結んでいます。またこの大学は岐阜市の友好都市杭州市にあります。

写真（発表資料参照のこと、以下同）は語学講座の様子ですけれども、左側が韓国語、右側が中国語の授業を受けているところです。こういった語学研修を午前中に実施して、語学のトレーニングをします。教員はネイティブですので、日本語は使わないんですね。中国語で中国語を勉強する、韓国語で韓国語を勉強するということになります。学生も最初は戸惑います。大学では、日本語ができる韓国人の先生が韓国語を教えるとか、そういったことが普通なんですけれども、そういう甘い考えではここでは対応できないわけです。質問も、韓国語で質問しなければいけないのです。このような環境の中で、短い時間ですけれども本場の語学を勉強してもらう機会を作っています。

また、現地学生との交流活動もプログラムに組み込んでおります。現地の学生は日本学科の学生と交流をしています。なぜかというと、こちらの学生はそれほど中国語、韓国語ができないわけです。英語であればともかく、中国語や韓国語についてはまだ勉強して半年とか１年半ぐらいですので、中国の大学の日本語学科、韓国の大学の日本語学科の学生さんと交流するわけです。そうすると、現地の学生が日本語を相当しゃべれますので、―２年生ぐらいになるとほとんど日常会話に問題はありません―現地の学生は日本語を使い、日本の学生は現地の言葉にチャレンジする、このように言葉のエクスチェンジのような形でコミュニケーションをとっています。

例えば左側の写真を見ていただくと、これは「韓国の歌を日本語に訳して歌ってみよう」という企画を向こうの学生が提案してくれて、翻訳作業をしているところです。相当手こずりながら、辞書を引いたり、いろいろ相談したりしながらやっています。それで、最後は日韓の学生で歌を一緒に歌って披露するということになります。

また、右側の写真は、中国語で自己紹介をしようという企画です。日本の学生は中国語で自己紹介をします。中国の学生は日本語で自己紹介をします。そして、違うところは「違うよ」と、上手にできたところは「上手にできたね」とアドバイスし、お互いに学び合う機会になっています。

また､現地の文化を学ぶ活動も行っています。左側は安東にある陶山書院です。安東は古くからの、いわゆる両班（ヤンバン）の文化が残っている土地として韓国でも有名なのですが、このような書院を訪れて、実際に儒教の文化というものがどういうものかということを学んでみる。こういった機会を持っております。

また、右側は中国茶体験です。杭州で有名な龍井茶です。同じお茶の文化といっても、日本と中国ではお茶の入れ方からして全然違います。また、味もちょっと違うわけですね。こういったものを実際に体験して学んでもらうということです。例えば「お茶の文化について」など、私が授業でいろいろと話をするよりは、実際にその場に行って、お茶を入れてもらって、実際に飲んでみるという方が、学習効果としては非常に高いものがあるわけです。こういった文化を学ぶプログラムも組み込んでいます。

そして、これもまた岐女短の特徴的なところなんですが､「アジアで岐阜を学ぶ」ということをやっています。これは何かということなんですけれども、左側の写真、これは韓国の大邱市、韓国の第３の都市です。ソウル、釜山、大邱という、日本でいえば名古屋に当たるような

都市なんですけれども、その大邱市に、これは岐阜の方でもほとんどご存じないと思うんですが、かつて合併する前の旧加納町の町長さんのお墓があるのですね。水崎林太郎さんという方なんですが、この方が、加納町長をやめられた後、ちょうど日韓併合の後で日本人がどんどん韓国に移住していったときに韓国に渡りまして、大邱というところに移り住みました。大邱には非常に広い平地があるのですが、水がとても不便な土地でしたので、時の朝鮮総督府から予算を回してもらい、向こうの地主さんと一緒に協力して灌漑用水池を作ったのです。その結果、大邱に非常に広大な田畑をつくることに成功しました。水崎さんは岐阜に帰られることなく、この大邱の地で亡くなられたんですが、当時、日本人たちは、韓国に住んでいても日本風のお墓を作って葬っていたのですが、水崎さんは、「自分は朝鮮風の墓に入りたい」と遺言し、ごらんのような朝鮮式の墓に葬られました。日本が戦争に負けて、韓国が解放されると、日本人の墓は侵略者たちの墓ですから次々壊されたのですが、水崎さんのお墓だけは、用水池を作り自分たちの村を豊かにしてくれた恩人ということで、写真に写っている徐彰教（ソ チャンギョ）さんのお父さんを中心に、自分たちが守っていこうということで、戦後も壊されずに、ずっと大邱の方々の手で守られているのです。岐阜にゆかりの方が大邱に眠っている。このような岐阜と大邱とをつなぐ具体的な事例のなかから、日韓の近現代史の一駒を勉強してみよう。そういった思いがこの企画に込められているわけです。

また、右側の写真には「日中不再戦」と書かれた碑文が写っています。これはもう名高いので皆さんご存じでしょうけれども、岐阜市長松尾吾策さんの碑文が杭州市にあるわけです。この碑文は、後ほど岐阜市の山本さんから詳しくお話しいただけると思うんですが、1962年に中国の杭州市と岐阜市との間で交換されたものです。日中国交正常化のなんと10年前に岐阜市と杭州市は既に友好関係を結んでいたわけですが、その現場を訪れて、戦中・戦後の岐阜と杭州、日本と中国の交流について学習するわけです。

また、左側の写真はホームステイ先の家族の方にいろいろな所へ連れていってもらった時の写真です。右側の写真は学生の写真なんですけれども、手に持っているのは、中国でホームステイした学生と交わした手紙です。この写真は、在学中の写真なのですが、次の写真は、実は最近送ってもらった写真です。3年前に中国でホストファミリーを引き受けてくれた学生が岐阜に遊びに来てくれたのです。左側に立っているのが中国の学生なんですが、この学生は、その後も日本語にさらに興味を持って、大学院に進んで、今、大阪の大学に留学中ということです。日本の学生も中国の学生もそれぞれにお互いに刺激を与え合いながら、互いの文化、互いの言葉を学び合う関係をつくっているのです。

最後に、「フィールドワーク」を紹介したいと思います。これは何かといいますと、例えば韓国に行きますね。韓国に行くと、韓国のホームステイ先の学生と一緒にペアを組んでいろんな韓国の文化について調査をしてきます。まず研修に参加する前にテーマを決めてもらいます。学生が「キムチについて勉強したい」というと、このフィールドワークでキムチについて調べてくるわけです。ホームステイ先の学生と2日間にわたって、キムチのことについていろいろ勉強して来て、調べてきた結果を、学内でポスター発表という形で報告します。左はある学生がキムチについて調べてきたポスターです。韓国のいろんなところで売られているキムチ、その形態の違いとか、材料の違い、味の違いなどについて分析しています。また、右側は、百丈鎮という中国の地方村落にホームステイした学生が、その百丈鎮の村人の一日というものを写真を交えながら紹介したものになっています。このような「フィールドワーク」を行っているのも岐女短の中国研修、韓国研修の一つの特徴になっております。

海外研修の問題点

上記のように、岐女短の海外研修について紹介させていただきましたが、あえてここで問題

点についても少し触れさせていただきたいと思います。まず一つ目ですが、岐女短は非常に歴史のある学校でして、歴史が古いとそれぞれの学科ごとの伝統や特長があり、各学科の独自性が強いのです。しかし、各学科では非常に思い入れを持ってやっているんですが、例えば皆さん方が岐女短を全体としてごらんになった際に、その全体としての印象が弱くなってしまう。岐女短は一体どんな海外交流活動をしているのかと聞かれたときに、どうしても個別分散的に説明せざるを得ないのです。今回ご紹介したのも、岐女短の海外研修のごく一部でしかないわけで、その全貌というものはどういうふうになっているのか、またその中で、どうやってさらに効果的な充実した研修をつくっていくのか、これが一つの課題といえると思います。

次に、教育効果に対する疑問。やはり研修先として人気があるのはアメリカ・ヨーロッパなわけですね。学生の中には、海外研修は授業だからということで、親がお金を出してくれる。また、大学の友達と海外に行ける。しかも先生もついているから安心。このような考え方の学生がいることも事実です。しかし、今後そのような学生が多くなっていくと、短大で海外研修をやっている意味は一体何なのかということを自問自答せざるを得なくなります。大学はツアー会社ではないわけで、大学で海外研修をやるからには、やはり通常のツアーであるとか、通常の個人旅行では味わえないような体験をしてほしいのです。そのあたりで、学生が求める研修像と、教員の求める研修像との間にギャップが生じることがあるのも偽らざる事実です。このような点も問題点として指摘できると思います。

最後に、事件・事故への対応。半年ほど前に世界遺産への落書きという問題が起こりまして、これは本当に大変でした。また、このことが私たちの大学だけに止まらず、ほかの大学や関係諸機関にも大変なご迷惑をおかけしてしまいましたが、その他にも、もしも何か事件や事故が起こった時には相当のリスクを大学が負うわけです。海外に学生を連れて行くということは当然それなりの危険も伴うわけで、場合によっては命にかかわることだって起こりかねないわけです。それだけのリスクの可能性を背負ってでも海外研修はやらなければいけないのか。そこら辺は常に学内の会議でも出てくることなんですね。にもかかわらず、岐女短では今年も全ての海外研修を実施しました。なぜそこまでして岐女短は海外研修をやるのかということについて、最後に海外研修の課題と利点として挙げさせていただきたいと思います。

海外研修の課題と利点

まず最初に課題として、先ほど海外研修が個別分散化しているということを自己批判しましたけれども、今後は学科を横断した、場合によっては大学を横断して、海外研修というものを計画したり、実施したり、そういったことができるのではないかと考えます。これは、一つ一つの学科単位で行くのでなく、複数の学科で行くとか、場合によっては、例えば岐阜大学と連携して行くとか、そういったものも今後のあり方として提案できるのではないかと考えております。このような活動を実施すれば、日本の学生同士も相互に刺激を与え合うことができますし、スケールメリットが生まれることにより、岐阜地域の大学生たちはこういう交流活動をしているのだということを、より多くの海外の人たちに伝えることができるのではないかと考えています。

また、先ほど教育メリットがあるのかというふうに自問自答しているという話をしましたが、先ほど紹介しましたように、研修後も卒業後も学生が交流を続けてくれている。卒業した後でも、「○○さんが日本に遊びに来ました」などとメールなどで教えてくれるのです。そういう学生たちに私たちは非常に勇気づけられるわけです。「やっぱり海外研修をやってよかったな」というふうに思うわけです。そういった学生は決して多くはないんですけれども、そういった学生が毎年数名ずつでも出てくれれば、それは海外研修を実施した意味があったと思えるのです。このような学生や卒業生たちに励ま

されて、「やはり今年も海外研修をやろう」という形で続いております。

また、これは授業中に感じることなのですが、海外での体験は、授業での実感へとつながるのです。海外で自分が体験してきたことを授業で聞くと、「ああ、あれか」という形で学生がすぐ理解してくれる。この実感というものはやはり海外研修を体験していないとわからない。「百聞は一見にしかず」と言いますけれども、やはりそれは正しくて、海外研修に参加すると授業内容への実感が生まれるわけです。

このようなことを総合すると、岐女短の海外研修というのは、学内や国内では決してなし得ない教育の貴重な場として、貴重な機会になっているということができます。

また、さらに広い視野から見た場合、社会にとって大学とは何かというところなんですが、国際相互理解というものが、これからさらに必要とされていく社会となっていきます。しかし、その国際相互理解の担い手となりうる市民はそんなに多いのかというと、実はそれほど多くはないと思うのです。これから21世紀に入って、そういった市民をこれから養成し、社会へと送り出していく。それが今後の大学の大きな社会的役割となっていくと考えられるわけです。このような意味からも、岐女短の海外研修の試みというのも、現代社会に対して高等教育機関が果たすべき役割を、一つ果たしていることになるのかなというふうに考えております。

少々早口になってしまいましたけれども、「岐阜から世界へ」ということで、岐女短の海外研修の報告をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

****

質疑応答

【フロア質問者】 研修の目的とか何か、それから期間とか、それぞれ別個の課題を与えて、期間も別々でということでやっておられるんでしょうか。

【須永　敬氏】 期間につきましては、英語英文学科はアメリカに２週間です。国際文化学科は、アメリカ・中国・韓国にそれぞれ１週間、生活デザイン学科はヨーロッパ、もしくはアジアに２週間という形になります。学習目的というのは、それぞれの学科で定めて行っているということになります。

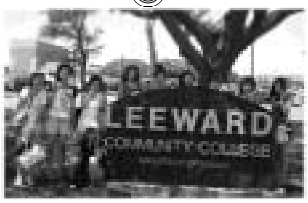
【フロア質問者】 学生さんは自分の実費で行かれると思うんですが、引率する先生は、大学の経費でやるのか、折半、半々でやるのか、その辺はいかがなんですか。

【須永　敬氏】 これも学科ごとにそれぞれ違います。英語英文学科のアメリカ研修は、旅行業者がマネージメントして引率教員の自己負担がないようにしています。国際文化学科の各研修は、教育後援会費を使って引率教員の旅費を支出しています。生活デザイン学科は、教員の自己負担で海外研修の引率をしています。

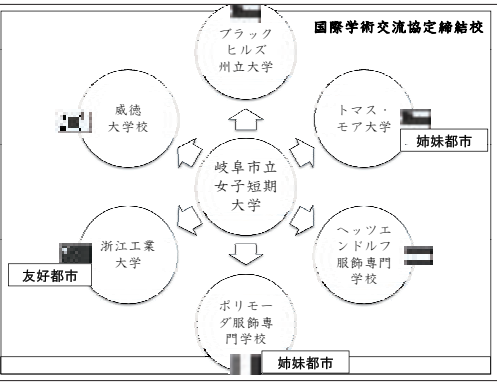
岐阜から世界へ
岐阜市立女子短期大学の国際交流活動

岐阜市立女子短期大学 国際文化学科 准教授　須永　敬

岐阜市立女子短期大学 国際交流活動の概要



国際学術交流協定締結校



留学生の受け入れ

- 2000年から2008年までの９年間で留学生は３人のみ。（全て中国からの学生）
- 短大は、４年制大学に比べて留学メリットが少ないのが実状。（全国国公立短大で留学生は７名のみ）
- 留学生受入部局の不在

⇩

- 編入・就職の道筋をつける必要がある。

短期訪問学生の受入

- 国際文化学科では、ブラックヒルズ州立大学（アメリカ）からの教員・学生訪問を随時受入。
- 海外研修担当教員と学生（国際交流クラブ）が受入事業を企画・担当。
- 韓国・中国の大学からも受入の打診があるが、費用の問題から実現していない。（宿泊施設の不在等）

海外研修の実施

- 現在、学内３学科で実施（英語英文学科・国際文化学科・生活デザイン学科）
- うち、英語英文・国際文化は正規カリキュラムとして実施。（単位付与）
- 全研修に、１～２名の専任教員が引率担当者として参加。

海外研修参加者数（00～08）

学科・研修名／年度		2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	合計参加人数
英語英文学科	アメリカ	19	23	9	6	11	34	27	32	28	189
	アメリカ(中期)	—	—	4	—	—	—	—	—	—	4
国際文化学科	アメリカ	—	15	16	10	25	22	22	—	33	143
	韓　国	12	—	24	4	10	11	8	15	11	95
	中　国	—	—	—	—	9	8	10	13	—	40
生活デザイン学科	ヨーロッパ・アジア	41	—	—	28	9	38	36	38	41	231
合　計		72	38	53	48	64	113	103	98	113	702

※海外研修実施3学科（食物栄養学科を除く）の学生定員＝340名（全学定員480名）

海外研修の実例

国際文化学科
中国研修・韓国研修を中心に

韓国・中国研修のあらまし

- 研修期間はいずれも８日間。（１単位）
- 事前説明会を３回実施。（業者参加）

- 午前中は語学講座（受入校の教員による）
- 午後は現地学生との交流活動

- ホームステイとフィールドワーク
- フィールドトリップ（文化史跡の見学）

アジアの文化をまなぶ

陶山書院で儒教文化を学ぶ
（安東市）

中国茶の文化を学ぶ
（杭州市 龍井）

国際交流協定校

韓国・威德大学校（慶州市）

中国・浙江工業大学（杭州市）

アジアで岐阜をまなぶ

元加納町長
水嶋林太郎氏墓地（大邱市）

岐阜・杭州友好の記念碑
（杭州市）

現地で語学をまなぶ

アジアの家庭を体験する（ホームステイ）

ホームステイ先での韓国体験

研修後も続く学生間交流

現地学生との交流

韓国の歌を日本語で歌おう
（歌詞を翻訳中）

中国語で自己紹介
（中国の学生は日本語で）

アジアをあるく（フィールドワーク）

韓国の食文化を報告

中国地方村落の生活を報告

海外研修の問題点

- 各学科・各研修の独自性が強い
- 教育効果に対する疑問
- 事件・事故への対応

海外研修の課題と利点

- 学科・大学を横断した海外研修の策定・実施が課題
- 研修後も続く学生間交流（卒業後も含む）
- 海外での「体験」が、授業での「実感」に変わる。

⇩

- 学内や国内では決してなしえない教育の「場」として、海外研修は貴重な機会となっている。
- 国際相互理解の担い手となる市民を育成することは、現代社会に高等教育機関が果たすべき大きな役割となっている。

岐阜から世界へ
岐阜市立女子短期大学の国際交流活動

終

ご清聴ありがとうございました。

発表（大学）

岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化

岐阜経済大学経営学部　准教授　　加　藤　由紀子

【司　会】 加藤由紀子先生は岐阜市のご出身で、横浜国立大学教育学部国語科をご卒業の後、岐阜大学、岐阜女子大学、岐阜聖徳大学などの非常勤講師を歴任され、現在は岐阜経済大学の准教授として留学生に日本語を教えていらっしゃいます。同時に、先生は浄土真宗本願寺派の僧侶でもいらっしゃいますので、岐阜地域の多くの場で活躍されていらっしゃいます。

本日は、「岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化」と題して、お話をいただきます。加藤先生、よろしくお願いいたします。

****

ただいまご紹介にあずかりました加藤由紀子です。今日、「岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化」というタイトルでお話をしますが、五つの観点からお話をしようと思っています。その五つの観点といいますのは、①岐阜経済大学が留学生を受け入れるようになった過程、②留学生数の推移、③留学生に対する支援策、④卒業後の就職・進学、⑤その他の国際交流活動という五つの項目です。

①留学生を受入れるようになった過程

私は、パワーポイントを使いませんので、配布資料の数字をご覧下さい。この資料からおわかりになると思いますが、留学生の受け入れが始まりましたのは1994年で、多くの大学で留学生の受け入れが始まった時期、あるいはそれよりやや遅い時期に当たるかと思います。

初めは経営学部だけの受け入れでしたが、留学生のレベルが全般的に高く、優秀な学生も多かったものですから、1999年には経済学部でも受け入れを開始いたしました。しかし、学生数が多くなるに従いまして、日本語のレベルが学部で学ぶのには不十分だという学生も出てきました。そのような学生に日本語の学習期間を与えてから、学部学生に受け入れようという考えが出てきましたのが、別科が発足した背景にあります。そして、2001年に別科ができました。この年には大学院も設立されまして、留学生も大学院で勉強するようになりました。

②留学生数の推移

まず、学部の留学生についてお話しいたします。資料からもおわかりになるかと思いますが、留学生の受け入れを始めたときは、さほど学生数が多くありませんでした。しかし、すぐに入学希望者というのは増えてまいりました。これは日本が留学生の受け入れを非常に多くした年に重なるかと思います。もちろん、受け入れ当初から入学試験を実施して学生を選抜していたのですが、入学希望者が多くなるのに並行して、選抜した後でも学生数が多くなるということが出てきました。しかし、その一回の入学試験で学生のレベルを正当に評価することはなかなか難しい面があったわけですね。それで、一部の留学生の質が低いということが出てきたときに、問題になってきたのは、日本人学生と授業をするときに支障が出てくるということでした。

そこで、受け入れる留学生数の見直しを行うということを大学はいたしました。そして、入試のシステムを変更いたしました。そのシステムを変更するのに使いましたのが、日本留学試験というもので、この制度につきましては、日本語教師の私としてはやや疑問が残るところもあるのですけれども、とりあえず、その留学試

験で200点以上とっている学生に受験資格を与える。そして、入試を行う。そうして、学生のレベルを保つようにいたしました。その結果、学生数は減少いたしましたけれども、よい留学生を確保することができるようになりました。

次に、別科生です。この留学生別科といいますのは、学部に入る前に語学教育をする特別なコースというふうに考えていただければいいかと思います。現在では、初級と中級の二つのレベルが前期の４月に授業をスタートさせます。それが後期には、それぞれ中級と上級クラスになるという２クラス制をとっています。

別科を修了した学生は、岐阜経済大学の学部、または大学院に入学する学生が大半ですけれども、修了後の進路は学生の自由に任せてあります。優秀な学生は岐阜経済大学よりもさらによい大学に行きます。最近でも、名古屋大学、名古屋工業大学、名古屋市立大学、そのようなところに進学しております。また逆に、岐阜経済大学に入れない学生というのもいるわけです。そういう学生は、申し訳ないのですが、他大学に進学していただく、あるいは専門学校に進学するという形をとっています。そこまでは私たちが責任を持って送り出すということをしています。

また、別科の２年目を希望する学生もいます。というのは、日本語能力試験４級はできるぐらいの学生を送ってきてくださいね、と言うのですが、ふたをあけてみると、「あいうえお」の隣ぐらいしか知らないという学生がいるものですから、４月に「あいうえお」を始めて、10ヵ月たった後で入学試験をやるということになります。もちろん優秀な学生は、それでも学部に受かっていく力をつける学生もいます。この子たちは本当に優秀な学生です。ですが、そうじゃない人は２年目をやりたいという人が出てくるわけですね。しかし、この場合でも全員を入れているというわけではありません。もう１年勉強すれば、学部に入って、しかもそこで十分勉強していける学生になり得ると、私たち教師が成績会議で判断した学生のみが２年目を続けることができます。

この２年目を受け入れる制度ができましてから、別科の学生数は増えてきました。しかし、授業の質を確保するために、規定の学生数というものは超えないように入学者数をコントロールしています。また、別科から岐阜経済大学の学部や大学院に進学する学生の場合も、他の日本語学校や他大学の別科から入学してくる学生と同様に、日本留学試験の点数基準というものもあります。ただし、ある点数基準を満たしていて、別科での成績もよく、なおかつ岐阜経済大だけを進学先に希望しているという学生の場合は、10名まで推薦枠というものをつくっております。この学生たちは面接試験を受けて、入学を認められるというふうになっています。

しかし先年度、先ほど言いましたが、「あいうえお」から始まったけれども優秀で、学部に推薦された学生がいたのですが、面接試験ではやはりうまく受け答えができなかったんですね。そのときの面接官というのは、当然、私のように教えている者が担当しますと不公平が生じるものですから、私と一切関係がないところで行われます。そして、その方たちは日本語教師ではありませんので、初級の学生に通じる日本語で必ずしも質問してくださるとは限らないわけです。そうすると、うまく受け答えができなかった。しかし、成績はいい。ですから、そこで入学の条件をつけてきます。つまり、別科の会話の授業、あるいは聴解の授業、そういうところに何コマ出なさい、という条件をつけた上での入学許可になります。もちろんそれは、とりなさいというふうに義務づけられた子だけではなくて、学部生の中から別科の授業が受けたいと希望する人がある場合にも、場合によっては私たちが許可をするということもあります。

③留学生に対する支援策

留学生全員に授業料免除という制度があります。免除というのは、ゼロではありませんが、補助するという形です。そして、奨学金制度もあります。実は、先ほどの岐阜女子短期大学の授業料は随分安い授業料を設定されていて、多分、岐阜大学以下だろうと思いますが、岐阜経

済大学の留学生に対する授業料は、ほぼ岐阜大学に匹敵するぐらい安くなっていると思っています。ですから、授業料免除と奨学金制度というもので、国からの補助金がほぼ使われてしまうというのが現状のようです。

そしてまた、宿舎も確保していまして、一般のアパートを借り上げて、安く留学生に提供しています。しかし、最近はアルバイトが減ってきたということがありまして、アルバイトが名古屋とか岐阜の中心にあるという学生が増えてきたんですね。そうしますと、岐阜経済大学の近くにある寮であるアパートまで帰ってくることができないということで、学校から提供してもらえるところではなくて、駅付近のアパートを自分で見つけて、そこに住むという学生も出てきています。

このように留学生を支援しているのですけれども、小規模な私立大学には支援にも限りがあるというのが現状です。留学生にかかる経費と、そして留学生からいただく授業料のバランスを考えると、留学生受け入れ当初から大学は経済的なマイナスを出していました。そこへもってきて、今度は少子化が進んでいますので、日本人学生の獲得が難しくなってきています。ですから、実際のことを言いますと、留学生を支援することがだんだん難しくなってきているということです。しかし、やはり大学というのは、国際化ということも考えなければいけないですし、大学の活性化ということも考えなければいけない。ですから、留学生の受け入れはとても大切なことだというのも事実です。ですから、この前も教授会でも出ていたのですが、支援の規模を小さくするということは避けよう。そして、できる限りの支援をしていこうという方針を打ち出しました。しかし、このあたりが小規模な私立大学の悩みであると言えます。

④卒業後の就職・進学

学部学生の大半が日本で就職しています。中国に支社があるような日本企業が中心ではありますが、日本人の学生と同じように一般企業へ就職している卒業生もいます。そして、その多くの企業というのは、岐阜や名古屋周辺にあるものです。つまり地域に貢献しているということが言えるかと思います。

大学院に進学する学生も多く、大学院進学率からいいますと、日本人の学生以上です。大学院を卒業した学生たちはほとんど日本で就職します。この場合は、一般企業だけでなく、中には大学の常勤で教えているという学生もいます。とはいいましても、外国人が日本で就職していくということはとても難しく、今後は岐阜周辺の企業と連帯を図って、優秀な留学生の就職先を確保することができたらと思っています。

そして、日本で就職する学生が多くいる一方で、日本で就職できなくて帰国する学生、あるいは個人的な理由で帰国する学生もいます。その人たちはそれぞれ母国でかなりいい職についています。中には、中国の大学で教えているという人もいます。この学生たちは、日本と母国、その人たちの国との友好のかけ橋になってくれていると思います。

⑤その他の国際交流活動

資料にありますように、姉妹提携校が３校あります。上海財経大学、ハワイ大学マノワ校、そして江西師範大学、この三つです。上海財経大学は、教員の学術交流というものを、定期的にではないけれども途切れずに行っています。そして、交換留学生は１年間の受け入れで、毎年２名を岐阜経済大学が受け入れています。そして同時に、日本からも中国へ１年間留学に送っています。ハワイ大学マノワ校の方は短期語学留学として、短期留学する学生にはその学費の補助を大学が行うという形で向こうに出しています。江西師範大学ですが、現在、交換留学生を１名、１年間の予定で受け入れておりまして、この先も毎年１名は受け入れていこうと思っています。この大学の常勤教員は岐阜経済大学の大学院を出た学生で、その人の努力で、今年度、姉妹提携をいたしました。提携して日が浅いので、教員の学術交流の予定はありますけれども、実施はまだしていません。

そして、その他の国際交流活動には、留学生と地域とのつながりがあります。地域の小・中学校における交流活動には積極的に出ていっております。そしてまた、地域のボランティア活動ということに対しても、日本人学生と一緒に行っています。よくあります外国人のスピーチコンテストというところも毎年出ていまして、自分たちの意見を述べ、割といい成績をとっております。ちょっとここで自慢させていただきますと、ＮＨＫで放送されます外国人の弁論大会では、２回入賞を果たしました。一度は５位になった学生もおります。それから、企業のインターンシップ制度にも積極的に出ていっております。

また、その他としましては、毎年、海外語学研修というのがあります。資料に入れるのを忘れましたが、異文化体験研修というのが年に１回、あるいは２回行われています。今年度はスポーツ先進国のドイツから地域スポーツ振興ということを考える・学ぶというテーマで、異文化体験旅行が実施されました。これはサバティカルでハイデルベルク大学に留学していた教員が、直接、交流計画を進めて実施したものです。本当にこれはよい成果を上げたと思います。

このような異文化体験研修というのは、教員が毎年発案・計画し、こういうのはどうでしょうというのを出しまして、そして学校が、これがいいと一つ決めるわけですね。一つ、ないしは二つですけれども、決めたところで学生を募集して、そして研修に出かけるという形をとっています。

今後の国際交流の展開

以上が、岐阜経済大学の留学生の実態と国際交流の概要ですけれども、今後は、次の五つのことを考えながら国際交流を進めていく必要があると思っています。

一つ目としましては、留学生を支援し、よりよい国際化を進めていきたいと考えても、地方の小規模な私立大学には経済的な限度というものがあります。優秀な留学生を地域で生かしたいとか、日本と他国との友好関係を進めていくべきだというふうに日本が真剣に考えるということであれば、今以上の公的資金の有効利用ということも考えていくべきだと思っています。

二つ目に、大学はできる限り地域に貢献するという使命があると思います。ですから、大学の知的財産を市民に提供するという努力はもちろんしなければならないことで、どの学校でもしていることではありますけれども、今後は日本人だけでなく、日本に在住している外国人もその恩恵が受けられるような制度を積極的につくっていく必要があると思います。例えばそれは日本語教育であったり、社会人教育であったりするかもしれません。

三つ目に、大学の、社会における意義を考えるとしましたら、そして、今二つ目に言いましたような意義を考えるとしましたら、大学間の協力体制は欠くことのできないことになると思います。

四つ目は、大学が地域の企業と結びついて、優秀な留学生が地域で就職しやすくなるようなシステムがつくれれば、それは日本の将来にとっても、よい結果をもたらすと思います。

五つ目は、うちの大学や岐阜大学もそうだと思いますが、留学生の多くは私費留学生ですから、アルバイトをしなければいけないとか、大変だとかいうこともあります。そうであったとしても、留学生が地域の人々や地域にある国際交流団体との交流を進めていく。留学生も進めていくということが必要だと思います。

さらに言えば、外国人の日本定住化ということが進んでいる現実を考えますと、国際交流活動に外国人がお客さんとして参加するということを、そこでとどめないで、それをさらに進めて、国籍はどうであれ、同じ地域に住む仲間として、外国籍の人も国際交流の団体の会員として活動していくというような方向が望ましいかと思います。

これからは以上の五つのような点を視野に入れながら、国際化を進めていく必要があると思います。また、よりよい活動を真剣に進めていこうとするなら、個々の機関がばらばらに活動するのではなく、あらゆる機関が連帯し、地域

と結びつき、協力していく、協力し合っていくということが大切だと思います。そういう意味で、このような場を提供してくださった岐阜大学には感謝しております。本当にありがとうございました。（拍手）

****

質疑応答

【フロア質問者】 私は今、岐阜大学大学院にいて、論文が終わったところで、一応関係なくなるのですが、また先生のおられる大垣の国際交流協会の会員で、ホームステイでもう何十年と受けています。そこで疑問があって、先生にお聞きしたいことがあります。この間、ここの大学院の博士コースでタイの人が帰られたんですが、日本の会社に就職したいんだけど、日本語が、先ほどお話しにあったように十分でないので、なかなか自分の行きたいところが決まらないということでした。それから、岐阜大学で博士コースを終わったセネガルの方がおられるんですが、もちろんセネガルなのでフランス語はぺらぺら、英語も大丈夫です。ただ、日本語はしゃべれるんだけど、書けないので、ちゃんとした会社というのはおかしいですけど、そういうところの就職がなかなかできないという話を聞きました。その一方で、国際交流協会で知り合った中国の大学院の方は、手紙も本当にきれいな漢字、日本語の入った普通の漢字でメールもやりとりしているんですけど、ちゃんと卒業のときには日本の会社に就職して、東京に行きました。そういうことがあるので、それくらい日本語ができないと就職できないということを大学の教育学部の教授の先生からも聞きました。そこが大変ネックというか、就職が難しいなと思っているのですが、どの程度まで日本語を理解したら就職できるとか、先生のその辺のお考えをできたらお聞きしたいなと思います。よろしくお願いします。

【加藤由紀子氏】 岐阜経済大学は主に中国の学生が多いものですから、漢字圏の学生なんですね。そういう人たちは、やっぱり日本語で読み書きをするというのは非常にメリットがあると思います。ですが、学部で卒業するとなりますと、やはり卒業論文も日本語で書かなければなりませんし、1年2年のときの日本語教育もありますけれども、就職のための日本語教育というのでは、会社での報告書の書き方とか、ビジネス文書の書き方というんですかね、そういうのまでできないと就職はできないというふうに私たちは指導しております。ですから、そうでない限り、何も読めない、書けない、私は特別で、外国人なんで、日本人と同じようにはできないんですというふうに甘えていたんではまず就職できないというと、そこまでは言えないかもしれません。コンピューターなんかで、日本語がなくてもできるような分野のことでしたらいいですけれども、経済学部を出るような事務職のような場合には、やはり日本語の読み書き、もちろん話すとか聞くも当然ですけれども、ほぼ日本人に匹敵するぐらいにならないと難しいのではないかと思っています。

岐阜経済大学　留学生在学者数の推移

年度	学部留学生数	大学院留学生数	別科留学生数	
1994	13（13）			経営学部で留学生受け入れ開始
1995	24（12）			
1996	38（12）			
1997	42（11）			
1998	42（22）			
1999	52（22）			経済学部で留学生受け入れ開始
2000	96（52）			
2001	186（71）	7（7）	32（32）	大学院および留学生別科を開設
2002	243（65）	16（9）	34（34）	
2003	256（59）	32（23）	32（28）	
2004	244（59）	36（15）	50（22）	
2005	197（27）	30（15）	40（25）	
2006	152（21）	29（13）	47（25）	
2007	115（15）	17（5）	42（17）	
2008	92（23）	12（8）	52（27）	

＊括弧内の数字は、その年度の入学者数を示している
　別科は２年目に残る学生および特別聴講生（日本に在住している外国人）の数が加算されている。

姉妹提携校

上海財経大学　教員の学術交換（定期的ではないが、途切れず続いている）
　交換留学生（１年間）の受け入れ（毎年２名）
　日本からも毎年２名、中国に１年間留学
ハワイ大学マノア校　短期語学研修（毎年）
江西師範大学　交換留学生（１年間）の受け入れ（毎年１名）
　教員の学術交換（予定はあるが実施はまだしていない）

その他

語学研修（フランス語、ドイツ語など）

発表（大学）

留学生教育と地域

―岐阜大学サマースクールの試み―

岐阜大学留学生センター　教授　　森　田　晃　一

【司　会】 森田晃一先生は、成城大学大学院文学研究科を卒業され、日本文化史、特に近世、近代の社会と文化に関する史的研究をご専門としていらっしゃいます。

先生は東京のご出身ですが、岐阜には非常に長くて、岐阜市文化財審議会評議員、岐阜市公共ホール管理財団評議員、岐阜市歴史博物館資料評価委員も担っていらっしゃいます。現在は岐阜大学留学生センターの教授として学生の教育に当たっていらっしゃいますが、本日は、「留学生教育と地域―岐阜大学サマースクールの試み―」と題しまして、お話をいただきます。よろしくお願いいたします。

****

岐阜大学留学生センターの森田でございます。今日は表題にございますように、「留学生教育と地域―岐阜大学サマースクールの試み―」ということでお話をさせていただきたいと思います。

岐阜大学の留学生センターでは、留学生教育を中心にいたしまして、現在六つほどの業務を行っております。まず、一つ目は日本語研修コース、二つ目に日本語・日本文化研修コース、三つ目に日本社会文化プログラム、四つ目に全学共通の日本語・日本事情教育、五つ目に留学生指導・相談部門、そして六つ目に、きょうの表題にありますサマースクール受入と派遣、この両方を行っております。

今日、テーマとさせていただきましたのは、この岐阜大学のサマースクールが地域密着型志向を持っておりまして、岐阜の文化を堪能するということを目的とした部分がありますので、この部分をご報告いたしまして、フォーラムの参考にしてもらいたいと考えたからでございます。

まず、今日の報告の主な内容ですけれども、岐阜大学サマースクールの学内における位置づけ、次に岐阜大学サマースクール参加学生数、1988年から2008年度までの21年間の推移をご覧いただきたいと思います。それから、現在の岐阜大学サマースクールの概要について。さらに、2008年度サマースクール、ここは地域密着型ということで三つの事例をお話ししたいと思います。最後に、今後の課題。

以上述べました５点につきまして、これから話を進めてまいります。

サマースクールの位置づけ

まず最初に、サマースクールの位置づけということになりますが、岐阜大学のサマースクールは、国立大学のサマースクールといたしましては非常に歴史が古く、1988年、このときは国際交流室の時代ですが、ここで始まっております。1988年から1995年までの８年間は、国際交流室によりましてサマースクール受入が行われておりました。それから、1996年に留学生センターが省令施設として設置されまして、1996年から2005年までの10年間は留学生センターが実施しております。留学生センターのもとにありました留学生交流推進委員会で、サマースクールの計画・立案、実行などがなされておりました。

2006年以降は、全学事業に位置づけられまして、2006年、07年、08年と、３年間にわたりまして留学生交流委員会で行っております。ただし、従来の経緯もございますものですから、実施担当は留学生センターとなっておりまして、留学生課と一致協力して、センターの方で実行

しております。

都合によりましてきょうは私が報告しておりますけれども、実際にこの地域密着型志向のサマースクールをセンターの方で担当しているのは土谷准教授になりますので、ご質問がございましたら、土谷准教授にも参加してもらいたいと思っております。

サマースクール参加者数

次に、参加者の数になりますが、1998年発足当初は７名でした。それが2008年には24名となっております。2003年、04年、05年、07年、08年とほぼ、2006年を除きまして20名を超えております。これは、宿泊施設の収容の関係で25名を上限としておりますので、大体25名を目指して参加希望大学に呼びかけを行っております。

参考といたしまして、今年度の参加者ですけれども、スウェーデン・ルンド大学から15名、韓国・ソウル産業大学から５名、韓国・木浦大学から３名、この韓国・木浦大学は今年度から初めての参加ということになります。それからアメリカ・ユタ州立大学から１名、これも2008年度に初参加となります。2008年度の合計24名はそのような内訳になっています。ちなみに来年度、ルンド大学から岐阜大学のサマースクールに参加希望ということで連絡が入りましたが、今のところ22名の希望があるということです。ルンド大学の方で絞りまして、これを10数名にしてもらう段取りになっています。

岐阜大学の学術交流協定校、かなり数が多うございますので、サマースクールに関しましては各大学に数を割り当てまして、この数の範囲内で送ってくれるように依頼をしているところでございます。

サマースクールの概要

次に、現在の岐阜大学サマースクールの概要ですけれども、期間は８週間コースと４週間コースの二つがあります。６月から８月初旬にかけて行っております。８週間コースは６月に始まりまして、４週間コースは７月に始まります。対象校は、今申し上げました学術交流協定校になります。参加人数も申し上げたとおり、宿舎の関係で上限25名と設定しております。

その内容ですけれども、まず日本語クラス、月曜から木曜の午前中２コマ設置しています。次に、日本文化・日本事情のクラス、これは学外の先生方も多数お招きしておりますので、月曜から木曜の午後、あるいは金曜日一日を使いまして、行っております。

例えば能・狂言では、実演者の方を京都からお招きしまして実施しています。本物を外国の学生たちに見てもらうということが趣旨でございます。それから、この日本事情クラスに関しましては、例年学長、学長特別顧問の各先生に講義を依頼いたしまして、受講生に対して提供していただいております。

それから、特色がありますのが、地域密着型のエクスカーションということになります。見学・旅行ですけれども、2008年度はこれをより地域密着型として強力に推し進めるということで企画を立て、留学生交流委員会で認めていただきました。岐阜の文化を堪能するということが目的でございます。

一番下のところに書きました宿舎の学外合宿所研修施設、「学外研」と略称で呼んでおりますけれども、長良にあります。毎年10名少々の岐阜大学学生チューターを募集しまして、学外研に数人ずつ泊り込み、20数名の参加学生と交流をするということで、これも大きな特色となっております。

一つ上に戻りまして、地域密着型のエクスカーション（見学・旅行）のところで言い漏らしましたので、補足いたします。地域密着型エクスカーション、今年度の見学は美濃市と土岐市にまいりました。それから、従来から行っている大相撲見学、今年度からの長良川鵜飼、以上の四つを実施しました。それから、例年、郡上市と郡上八幡国際友好協会の全面的な協力を得まして、郡上市でホームステイをさせていただいております。各々こうした地域密着型のエクスカーション（見学・旅行）などは、自治体とボランティア団体の協力のもとで行っている

ものでございます。

サマースクールにおける地域との連携

さて、きょうのテーマでございます2008年度サマースクールにおける地域との連携ということで、3点これから挙げさせていただきたいと思います。

まず、郡上プログラム。これは1996年から始められたものでございます。先ほど申し上げましたように、郡上市と郡上八幡国際友好協会の全面的な協力のもとに実施されております。3泊4日のホームステイ、その中で書道、茶道、紙細工、座禅、郡上おどり、小学生との交流など、さまざまな文化体験をさせていただいております。郡上おどりの開催に合わせてこのホームステイを行っています。この郡上プログラムは、サマースクールのプログラム全体の中でも、最も学生の評価が高いプログラムとなっています。

皆様のお手元にこうした冊子（『岐阜大学夏期短期留学サマースクール2008』）があるかと存じますけれども、この冊子、2008年度版が出ておりますが、毎年こうした報告書を発行しておりまして、この中に郡上プログラムの高い評価というものも載っておりますので、後でお読みいただければと思います。これ（スライド写真）が郡上プログラムの学生の様子になります。小学生との交流、あるいは自己紹介、散策、書道等々がここに写真として上げられております。

次に2番目の、サマースクールにおける地域との連携ですが、土岐の陶芸体験、これは昨年度から行われています。過去には多治見でも実施しております。これも郡上と同じように、土岐市国際交流協会の全面的な協力によって行われているものでございます。

まず、今年度は織部の里公園に参りまして、そこに隣接した美濃陶磁器歴史館を見学いたしました。その後、セラテクノ土岐とどんぶり会館で実作体験。セラテクノ土岐では、セラート体験、これはセラート紙からの折り鶴を制作するものです。それから、どんぶり会館の陶芸体験では、ろくろを使い、あるいは絵つけなども行いました。これもまた、大変好評な実作体験でございまして、岐阜の思い出として、それぞれが作製した陶器をそれぞれの国へ、スウェーデン、韓国、アメリカへと持ち帰ってもらいました。そのときの様子で、（スライド写真）左側にありますのがどんぶり会館での制作の様子、右側の上が絵つけの体験の様子になります。

次に、地域との連携の3番目ですけれども、美濃市訪問です。これは今年度初めて実施したものになります。

まず、美濃市役所にまいりまして、それからボランティア団体の協力による、着つけと和太鼓の体験を行いました。美濃和紙の里会館では、紙すき体験を行っております。（スライド写真）左側の下になりますが、紙すき体験。そして、浴衣を着まして、うだつの上がる町並みを歩く。これが左側の上になります。そして、とても好評でありました和太鼓の実習ということで、右側の上と右側の下ということになります。

今後の課題

以上、岐阜大学サマースクールにおける三つの地域との連携につきまして紹介いたしましたが、今後の課題として、私どもが感じていることを表に記してみました。

まず、さらなる地域連携強化のために、一つは、スムーズな情報の授受が必要であると感じております。大学といたしましては、留学生との交流に興味があるか、そこで何ができるか、いつ、何人受け入れてもらえるか、こうした情報をまず大学側で収集する必要があります。地域の方では、大学にどのような留学生がいるのか、どのような活動に参加できるのか、こういう情報が必要であろうかと想像しております。こうしたスムーズな情報の授受というものを今後行っていきたいと考えています。

次に、双方の意識のすり合わせ、ここは少し説明が必要かもしれません。留学生たち、サマースクールに参加してくる学生たちは、あくまでも日本語、日本文化を学びたいという意識を持ってやってまいります。しかしながら、例え

ば欧米系のスウェーデン・ルンド大学の学生に対しましては、英語に対する期待というものが大変多うございまして、その意識のずれというものが少し問題化したことがございます。そこで、より有効に、どのような形で、どうしたクラスをつくり上げていくのかということに関しましては、大学側として、あるいは地域側として、今後はすり合わせが必要であろうと考えております。

最後ですが、今後の緊密な連携、情報交換によりまして、こうした課題につきまして解決、発展を目指したいと考えております。

さて、最初に申し上げました岐阜大学の留学生センターの留学生教育に関する主な仕事の中で、今回は特に、サマースクール受入に関しましてご報告いたしましたけれども、そのほかにも、地域連携が必要な、あるいは地域連携が有効なプログラムがセンターの中にはございます。こうした方面をさらに発展させまして、地域との連携というものを強力に進めていきたいというふうにセンターの方では考えております。

ご清聴ありがとうございました。以上でございます。（拍手）

****

質疑応答

【フロア質問者】 千葉にございます敬愛大学より参りました畑中と申します。詳しいお話をありがとうございました。

地域に密着した活動ということで、事前の綿密な準備が必要かと存じますけれども、およそいつぐらいの時期から、今年はここの地域にまいりましょうかという準備を進めていらっしゃるんでしょうか。

【森田晃一氏】 今年度に関しましては、前年の11月に昨年度の反省会を行いまして、11月以降、地域密着型のサマースクールをどのように展開していくかという話し合いを進めてまいりました。その中で、土谷先生を中心に、土岐、美濃、そして郡上等を訪問させていただいて、こうしたプログラムをつくり上げてきたというところでございます。

【フロア質問者】 そうすると、ほぼ1年近くの準備期間を設けて、そして夏に臨まれたということですね。

【森田晃一氏】 そうですね。10ヵ月から1年。

【司　会】 ほかにご質問ございませんでしょうか。土谷先生、何か補足されることはございますか。

【土谷准教授】 岐阜大学留学生センターの土谷です。森田教授とともに、サマースクールのコーディネーターをやっております。

地域密着にどうして方向転換をしたかということだけ、1点加えますと、その前の年までは京都旅行をプログラムに入れていたんですが、京都旅行に関しましては、サマースクールが始まった20年前に比べて、現在ではもう情報は自分でとれると。自分で行ける。わざわざそんなところに連れていってくれなくてもという声が学生から上がりまして、それで岐阜大学ならではのものをぜひ提供していこうということで、2008年度から地域密着ということを強く打ち出しております。ただし、全部が全部うまくいったわけではございませんので、こんなふうに岐阜にはもっといい場所があるよですとか、こんなことをやったらどうとかというご提案がありましたら、本日、封筒の中にアンケートを入れておりますので、ぜひその点のアドバイスもいただければ、ありがたいと思っています。よろしくお願いいたします。

留学生教育と地域
ー岐阜大学ｻﾏｰｽｸｰﾙの試みー

岐阜大学留学生ｾﾝﾀｰ
森田晃一

参考：2008年度参加者

- ﾙﾝﾄﾞ大学：15名
- ｿｳﾙ産業大学：5名
- 木浦（もっぽ）大学：3名（2008年度初参加）
- ﾕﾀ州立大学：1名（2008年度初参加）

合計：24名

（2009年度参加希望者・・・ﾙﾝﾄﾞ大学22名）

主な内容

- 岐大ｻﾏｰｽｸｰﾙ（受入）の位置づけ
- 参加学生数（88～08年度）
- 現在の岐大ｻﾏｰｽｸｰﾙの概要
- 2008年度ｻﾏｰｽｸｰﾙ　地域との連携（1）～（3）
- 今後の課題　ー地域連携に関してー

現在の岐大ｻﾏｰｽｸｰﾙ概要

- 期間：8週間ｺｰｽ・4週間ｺｰｽ（6～7月）
- 対象校：学術交流協定校
- 参加人数：上限25名
- 日本語ｸﾗｽ：月～木午前
- 日本文化・日本事情ｸﾗｽ：月～木午後、金
- ｴｸｽｶｰｼｮﾝ（見学・旅行）
  ・・・地域密着型志向ー岐阜の文化を堪能する
- 宿舎：学外合宿所研修施設（学外研・長良）

ｻﾏｰｽｸｰﾙ（受入）の位置づけ

- 1988～1995年：国際交流室
- 1996～2005年：留学生ｾﾝﾀｰ（留学生交流推進委員会）
- 2006年～：留学生交流委員会
  ∴全学事業

※実施担当は留学生ｾﾝﾀｰ

2008年度ｻﾏｰｽｸｰﾙ　地域との連携（1）

郡上ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ（1996～）

- 郡上市・郡上八幡国際友好協会の全面的協力
- 3泊4日ﾎｰﾑｽﾃｲ
- 書道・茶道・紙細工・座禅・郡上おどり・小学生との交流等文化体験
- ｻﾏｰｽｸｰﾙﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの中で最も学生の評価が高いﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

参加者学生数（88～08年度）

1988	7	1995	12	2002	11
1989	10	1996	13	2003	19
1990	5	1997	18	2004	23
1991	5	1998	16	2005	28
1992	5	1999	18	2006	18
1993	17	2000	14	2007	21
1994	11	2001	15	2008	24

2008年度ｻﾏｰｽｸｰﾙ　地域との連携（2）

土岐陶芸体験（2007～）
（過去に多治見でも実施）

- 土岐市国際交流協会の協力
- 織部の里公園、美濃陶磁器歴史館
- ｾﾗﾃｸﾉ土岐、どんぶり会館にて実作

- 好評な実作体験、岐阜の思い出として自作の陶器を国へ

2008年度サマースクール　地域との連携（3）

美濃市訪問（2008）

- 美濃市役所、ボランティア団体（着付け、和太鼓）の全面的協力
- 美濃和紙の里会館（紙漉き体験）、浴衣体験
- 和太鼓実習

- 和太鼓実習が大好評

今後の課題　ー地域連携に関してー

更なる地域連携の強化のために

- スムースな情報の授受関係：
  - 大学・・・留学生との交流に興味があるか
    そこで何ができるか
    いつ、何人受け入れてもらえるか
  - 地域・・・大学にどのような留学生がいるのか
    どのような活動に参加できるのか
- 双方の意識のすり合わせ：
  - あくまでも「日本語」を学びたい留学生
  - 英語使用の期待

⇒ 今後の緊密な連携・情報交換によって
解決・発展を目指す

発表（自治体）

地域と大学との連携を目指して

岐阜県総合企画部国際課　新　田　　豊

【司　会】 新田豊様は、名古屋市立大学経済学部をご卒業後、岐阜県職員となられました。そして平成５年からは国際連合地域開発センターというところに派遣されまして、東南アジアの地域社会開発等に参画し、インド、インドネシア、ラオス、タイ、ベトナム、マレーシアを訪問されております。その後も青少年国際課に勤務され、国際交流関係のさまざまな会議や大会を担当され、現在は国際課で多文化共生を担当していらっしゃいます。

本日は「地域と大学との連携を目指して」という、このフォーラムの趣旨にぴったりのテーマでお話しをいただきます。それでは新田様、よろしくお願いいたします。

****

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました岐阜県庁国際課の新田と申します。よろしくお願いいたします。

今、紹介にありましたように、名古屋に国際連合の事務所がただ一つだけ、名古屋国際センターのビルの中にあるんですけれども、当時、愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市から職員が派遣されて、研究活動、研修活動を応援するということで、私も採用されまして、恥ずかしながら英語が全くできない環境で英語で会議をするというところに放り込まれまして、大変場違いなところに間違って行ったなあというところだったんですが、おかげさまでこれまで、皆さんの税金で、実は20ヵ国以上訪問しておりまして、その経験が大変今の仕事に活きております。

国際交流、国際協力、多文化共生と今つながる中、多文化共生が一番何かどろどろとしておるんですけれども、楽しい国際交流、やはり楽しいこともないと続きませんので、ぜひこれは、交流だけ、協力だけ、多文化共生だけではなくて、全部包括して進めていただくのが一番いいのかなというふうに考えております。

本日お見えの皆様には釈迦に説法になるかもしれませんが、「地域と大学との連携を目指して」ということで、国際化の流れから順次ご説明をさせていただきたいと思います。

国際化の流れ ①国際交流

国際交流というのが最初に自治体でもよく言われるようになりました。これは皆さん、よくご存じのように、自治体の場合は姉妹提携、友好提携というようなことで、相互訪問するとか、それから学生さんでは交換留学をする、地域の皆さんの間では料理教室を行うとか日本文化の探検をする、または、先ほど各大学からご紹介がありましたように、ホームステイを受けるというようなことが国際交流として行われてきました。

特に自治体に特化してみますと、1987年に国の方で最初に国際交流の指針が出まして、それ以来、岐阜県では、例えば財団法人岐阜県国際交流センターが地域国際化協会となっておりますように、「地域の国際化」ということで進んできたわけであります。それぞれの市町村でも国際交流協会、それからそれぞれの地域で国際交流団体が活発に活動されてきたということであります。

ここは岐阜市ですので、岐阜市の国際交流について姉妹提携のことをまとめてきましたが、先ほどの指針が出る10年も前から、岐阜市では既にイタリアのフィレンツェ市と交流を進めていて、それから、一番新しくは、合併の関係でカナダのサンダーベイ市と交流というような流

れでございます。

国際化の流れ ②国際交流から国際協力へ

そういう流れの中、途中、国際交流から国際協力ということで、これもまた平成７年に国際協力推進大綱の策定というような国の指針もありまして、国際協力に移るようになってきました。

国際協力は何かといいますと、よく新聞なんかにも出ておりますけれども、相手国で井戸を掘ったり、学校建設をしたり、また植林活動をしたり、日本の機器で使わなくなったものを送ってあげたりというようなことが進んでいるわけですね。例えば私が訪問したラオスでは、日本の機織り機械を持っていって、綿織物で商品化させて地域の現金収入を得るようにするとか、それからインドではデカン高原の山奥まで、ハイデラバードというところから10時間もバスに乗って行ったんですけれども、全く雨が降らないところで植物が育ちませんから、雨期の間にため池に水をためて灌漑用水路を作って、乾期でも植物が作れるようにして現金収入を得ることで、その村に学校を独自で建設して、その学校を卒業した人が著名な大学に入学するようにまでなったということもあります。

このような国際協力活動というようなことが盛んになりまして、岐阜県では高山に本拠を持つソムニードというＮＰＯ団体が、これはＪＩＣＡでも大変有名なんですけれども、世界的に活動されておりますし、最近では地元羽島市の団体の方がカンボジアで学校を作られるというような取り組みもされています。

岐阜県内の在住外国人

こういう中、岐阜県は今どういう状況になっているかと申しますと、外国人登録者数は、この12月末、岐阜県調べですけれども５万7,250人。実は11月現在からすると300人減りまして、１月末現在の数字が実はつい昨日出たんですけれども、700人近く減っておりまして、ここ２ヵ月で1,000人減っておりますが、そうは言いながら、ここのところ外国人が非常に多くなっています。

国籍別で見ますと、ブラジルの方がずっと増えております。これは、国際交流をやりなさいと国の指針が出た1989年に、いわゆる入管法（出入国管理及び難民認定法）が改正になって1990年施行になったんですが、いわゆる日系人、日系２世、３世の方が日本に入国できるようになりまして一気に増えたということであります。岐阜県の特徴としては、あと中国の方、さらに最近ではフィリピンの方が増えています。

実は法務省が在留外国人統計というのを出しているんでけれども、この統計の人口割でいきますと、岐阜県、何とフィリピンの方が人口比率では全国１位、中国の方は全国２位、ブラジルの方は全国５位というようにすごい上位を占めております。単純の人数でも全国で第９位というような状態ですし、人口比率の2.72％というのは全国第４位ということで、非常に外国人が多いというような、知らない間に増え、こうなっていったというわけです。

最近の傾向は、特にこの右肩上がりで急激に伸びているのが、永住資格を取っている方が非常に多いということであります。この永住資格を取っている方、あんまり言うと怒られるんですけれども、入国管理局が３年ごとにビザを更新するのは面倒くさいからということで、非常に安易に永住ビザを出してしまっていることが少し問題になっておりますが、そういうことで永住ビザを取る方が非常に多くなっていました。ただ、昨年11月以降の急激な経済情勢の悪化で、永住ビザを取ったんですけれども、片道切符で帰国されている方が非常に増えております。そういう方は、この外国人統計の統計データである外国人登録を残したまま帰国されますので、外国人登録上は先ほどの1,000人減少という数字しか出ないんですけれども、実際はもっと多くの方が帰国しているものと想定しております。

地域に住む外国人との課題

そういう中、地域では摩擦が発生してしまいました。これは、留学生が最近増えてきた中で

日本語ができない人が増えたという報告もありましたように、やはり一番はコミュニケーション不足です。研修生の場合は母国で日本語の研修を３ヵ月することになっているんですが、実際は全然研修を受けずにお見えになる方が増えているとか、それから日系人の場合は身分の資格で入国できますから、日本語が全くできなくても派遣会社が入れてしまうというようなことがありまして、三大問題（ゴミ出し、深夜の騒音、違法駐車）といった地域のルールが守られていないということが大きな問題であります。

さらに、入管法が改正されてもう20年近くになろうというのに、在住外国人の側も日本の習慣になじもうとする意識が非常に低くて、17～８年も日本にいるのに、今やっと日本語教室に一生懸命通っているというのが実態です。それから、我々が反省しなきゃいけないんですが、行政情報も全然母国語になっておりません。定額給付金は定住外国人にも出されるということなんですけれども、ポルトガル語や英語に翻訳されて、給付金をもらうためには、２月１日までに今住んでいる場所で外国人登録をきちっとやりなさいという印刷物ができたのは１月の末です。このように行政も全然追いついていないんですけれども、これは反省事項として私たちも頑張ろうとしているところです。

外国人は何で（地域のルールを）覚えないんだとよく苦情がありますけど、例えばブラジルには職業としてゴミを処理をする人がいますので、ポイポイ捨ててもいいわけなんですね。ですから、（ゴミ出しの）日にちや場所を守ろうという意識がもともとありませんし、ヨーロッパの国でも、オーストラリアなんかでも、夜遅くまでバーベキューをするというのは文化ですよね。これは家の間隔が広いので、多少騒いでも音が聞こえないという国の事情もあるんです。日本はあまりにも狭いので、すぐ隣に音が響いてしまうということもあるんですが、そういうこともありまして騒音は気になる。

違法駐車もそうですね。ヨーロッパなんか行くと道路に車を並べて、バンパーをぶつけながら駐車するんですけれども、そういう国と日本とでは全然違うということで、これは一概に外国人が日本のことを知らなさ過ぎるというだけでは済まされないというようなこともあるかと考えております。

国際化の流れ ③多文化共生へ

こうしたことから、国の方も、今、多文化共生という言葉を使っておりますけれども、取り組まなきゃいけないという指針を出しまして、その中で岐阜県としては基本方針を定めました。県内在住の外国人を、地域社会を構成する外国籍の県民として認識して、言葉の壁、制度の壁、心の壁を取り除き、多文化共生社会の実現を目指すというふうにはっきりと決めて取り組んでおります。テレビや新聞で私の名前や顔を見たことがあると思いますが、今、憲法89条問題（注）で文科省にけんかを売っているのが私でございます。

（注）憲法89条問題（中日新聞2009年02月12日朝刊より）
岐阜県国際課の推計で県内で二百五十人以上の日系ブラジル人の子が不就学状態という。「日系ブラジル人の不就学をなくすために親の負担を減らしたい。公立校の受け入れ態勢が整っていないので、ブラジル人学校で続けてほしい」と同課は言う。県はブラジル政府が認可したことのある県内四校に、返済不要の支援を検討。うち三校は日本の学校法人ではない。これがネックになった。
県が文部科学省に問い合わせると「学校法人の認可を受けていない所は公の支配に属しておらず、公金支出は憲法八九条に抵触する」との回答だった。県は親と学校で補助金の受け皿団体をつくることも考えたが、支援を急がねばならない。
****
憲法89条【公の財産の支出又は利用の制限】
公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

岐阜県だけではないんですけれども、今後岐阜県は更にどうなるかといいますと、よく言われるように少子・高齢化であります。これは、若者の比率が下がらなければ問題ないんですけれども、若い方が減って高齢者の方が増え、生産労働人口が減っていくことが問題になるわけですね。この部分を外国人の方に補っていただ

こうという議論が今盛んにありまして、留学生の話も、先ほど30万人計画という話がありましたが、ある議員の連盟では100万人計画というのも昨年発表されているような状態であります。

地域の思い

こうした中、地域としては外国人の方と交流したいという希望は実は意外に高くて、しかも、特に日本にいる外国人の方と交流したい。「英語で話したい日本人と、日本語が話したい留学生」の話が先ほど森田先生からありましたけれども、日本語で交流したい人も意外に多いんですね。けれども、在住外国人の人がどこにいるのか、全然見えていないというのが地域の問題としてありまして、国際交流をする上で問題になってくる。

国際協力でいきますと、どこの国とやったらいいんだろうか、誰とやったらスムーズにいくんだろうか。それから、やったんだけれどもうまくいかなかったというのが非常に多く出ております。特に最近は、東南アジアでは井戸を掘っても汚染された地下水が出ますので、使えないというような事情もありまして、なかなか継続性が確保されないという問題もあります。

多文化共生でいきますと、やはり翻訳・通訳の問題が非常に多いです。それから文化風習がよくわからないということです。外国人の方がどこにいるのかわからないのと同じように、コミュニティー側にも、誰が中心の人なのかわからない、実際に行っても参加者が少ないというような問題が出ております。

大学に対する期待

そういう中で、大学に対する希望は非常に高いものがあります。

ご存じのように留学生さんは大学にお見えで、今いろんな国から来ておられますので、手っ取り早いと言っては申し訳ないんですけれども、やはり大学を通じて交流したいと。それから、留学生の場合、日本語ができるので、交流もしやすいなあというような思い。それから、国際協力でいうと、大学がいろんなところに研究開発で入っている、そこの国を紹介してほしいと。または、そこの中心人物となる方を紹介していただければ継続性も確保できるのではないかというような期待。多文化共生では、翻訳・通訳の協力をしてほしい。それから地域とのつなぎ役にもなってほしい。それから、学部によっては、例えば岐阜大学には教育学部があるわけですけれども、学生さんに現場を見てほしい。そんなような希望があるわけです。

大学との交流の課題

こうした中、課題もないわけではありません。先ほど森田先生からもお話がありましたけれども、お願いする側の地域の国際交流活動をしている団体は、どうしても自分たちの目的に固執しがちになりますので、とにかく何でもいいからやりたいというふうに曖昧になる可能性が高い。それから、一回やると、今度はこれ、次はこれ、あれもこれもというふうに過大になり過ぎる傾向があるかと思います。さらに考えなきゃいけないのは、岐阜経済大学に奨学金が出るとか、岐阜大学も出されたというように、留学生も今は大変な状況ですので、ボランティア＝無償でいいのか。やはりある時間拘束するわけですから、それなりのもの、ぼろもうけというような状態になる必要はありませんけれども、やはりそれなりのことを考えてあげないと、なかなか留学生も出にくいというようなところはあるかと思います。

それから、大学側に対するものとしては、研究成果として大学だけが取ってしまって、地域に還元がないんじゃないかと。それから、お願いをした学生が来たんだけど、お願いした内容をよく理解しないで来たので、結局、お客さんとして遊んだだけで、何をやったかわからなかったというようなこと。それから、継続性は大学だけではなく、お願いする側もあるんですけれども、例えば教授の方が異動されたらぱたっと終わってしまったというようなことも指摘があるところです。

課題の解決に向けて

こうした中、解決のためには、お願いする側も受ける大学側も、その大学の特殊性があるわけですね。例えば岐阜大学には教員養成課程がありますので、ブラジル人が多い学校で教職の研修を受けて、教員になったときに突然外国人のいるクラスに行って悩まないようにするという効果もあるかと思いますし、医学部がありますので、ちょっと他の大学の例で恐縮なんですが、群馬大学は、言葉の不自由な方が問診票を、コンピューター上でボタンを押すと、何科のどこで、どんな症状で、どういうふうなレベルかというようなことが問診票が自動的にできるようにコンピューターで何ヵ国かできているんですね。それが外国人の方だけじゃなくて、実は日本語版も一緒にできていたおかげで、言葉が不自由な日本人もそれを使うことで、日本人にも大変効果があったというふうに報告があるんですけれども、そういうふうに、学校ごとの特色を十分生かして交流することが大事かと思います。

それから、先ほども少し言いましたけど、お互いのメリットを考えないといけません。留学生にもそれなりのメリット、大学にも研究成果としてのメリット、それから大学側の方はやはり助言とか提案とか、または技術指導というような形で地域に還元していただければいいのではないか。例えば井戸掘りの場合、浅いから汚染した水が出る。じゃあ深く掘ればいい。安くて深く掘る方法は、例えば岐阜大学の工学部ですごくいい方法があるよといえば、それができるかもしれないということですね。そんなようなお互いのメリットを考える必要がある。

そして継続性ですね。学校単位で受けていただけることで、地域の団体としては代表がかわっても、大学側としては教授が代わっても継続できるような、団体対大学というようなつながりができれば継続性が図れるのではないかというようなことを考えております。

これは特定の大学をどうのこうのではなくて、私は県という立場上、他の県や市の方とお話ができるので、一般論的にまとめました。ここにいる方に釈迦に説法だったかもしれませんが、こういうようなことを考えれば、さらに地域と大学との連携が深まるのではないかと考えております。

どうもご清聴、ありがとうございました。（拍手）

****

質疑応答

【フロア質問者】 愛知文教大学（愛知県小牧市）の稲熊と申します。今日は先生のお話を伺えて大変ありがたく思います。

いろいろお伺いしたいことはあるんですけれども、一つだけお聞かせ願えればと思いますのは、つい昨日も、非常に日本語のレベルの低いというか、明らかに片言以下の中国人の永住ビザの人がいたんですけれども、今までの永住ビザの出し方ということと、今後の永住許可というものの方針がどのように変わっていくのか、あるいは先生がどのようにお考えかというのを、一個人としてのお考え、また、国と地方という差はございますけれども、行政側の方ということでお話を聞かせていただければと思うんですけれども、よろしくお願いいたします。

【新田　豊氏】 先ほどもちょっと述べましたが、入国管理局は通常、日系人の資格の場合3年ごとに更新なんですが、あまりに今外国人の方が増えたので、3年ごとの更新が非常に増えてしまいまして、永住ビザですと更新しなくてもいいもんですから、本当は厳格な規定があるんですね。日本語能力があるか、日本の社会文化・ルールを知っているかというようなことの簡単な問審がちゃんとあるんですけれども、それから税金をちゃんと払っているかというようなことがあるんですが、特に日本語の試験等なしで簡単に出してしまうようになっているのが現状です。

我々としてはやはり厳格に、永住ビザを与えるということは日本にずっと住んでもいいということですし、今のところ、一回永住ビザを出してしまうとどこにでも行けるわけですね。外国人登録制度がちょっと未完成な部分があって、どこに住んでいるのかわからなくなってし

まいますので、せめてそういう方がどこに行っても困らないようにするには、やはり日本語能力が必要ですので、永住ビザを出すには日本語の能力をしっかりチェックしてほしいと。そのかわり、日本国として日本語を覚えていただくちゃんとしたシステムをつくるべきだというふうに考えておりまして、一応、そのように国提案などはしております。

地域と大学との連携を目指して

平成21年2月27日
岐阜県総合企画部国際課
新田　豊

国際化の流れ①

○国際交流
- ・相互訪問（姉妹提携、友好提携、交換留学）
- ・文化交流（料理教室、日本文化体験）
- ・ホームステイ

○国の指針
- 「地方公共団体における国際交流の在り方に関する指針」（1987年）
- 「国際交流のまちづくりのための指針について」（1988年）
- 「地域国際交流推進大綱の策定に関する指針について」（1989年）

→ **地域の国際交流協会・国際交流団体の発達**

3小学校に建設、寄贈
カンボジアの子どもに校舎を

2月16日　岐阜新聞　22面

イタリア　フィレンツェ市
1978年から

中国　浙江省杭州市
1979年から

ブラジル　カンピーナス市
1982年から

岐阜市の姉妹交流

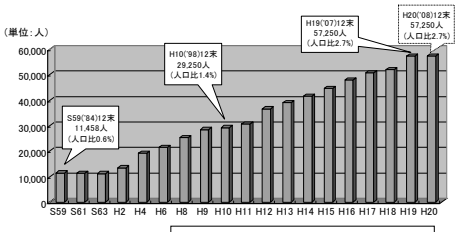
カナダ　サンダーベイ市
2007年から

ウィーン市マイドリング区
1994年から

米　シンシナティ市
1988年から

1. 外国人登録者数の推移【岐阜県】

平成20年12月末現在における**外国人登録者数は5万7，250人**で、前年同数であるが、11月末現在の57，565人からは300人以上の減少となっている。平成20年に入り、増加率は低いながらも増加傾向であったが、11月以降の経済情勢の悪化により、12月には減少に転じている。
外国人登録を抹消したまま帰国している人が多いため、実際にはもっと減少していると思われる。



昭和59年から平成19年までは、毎年12月31日現在（法務省調べ）
平成20年は、12月31日現在（岐阜県国際課調べ）

1

国際化の流れ②

◆国際交流から国際協力へ

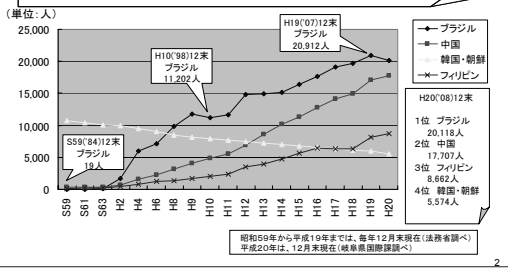
○国の指針
- 「自治体国際協力推進大綱の策定に関する指針」（平成7年）
- 「地域国際交流推進大綱及び自治体国際協力推進大綱における民間団体の位置づけについて」（平成12年）

○国際協力
・井戸掘り、学校建設、植林、中古機器の譲渡

→　地域のNPO団体の発達

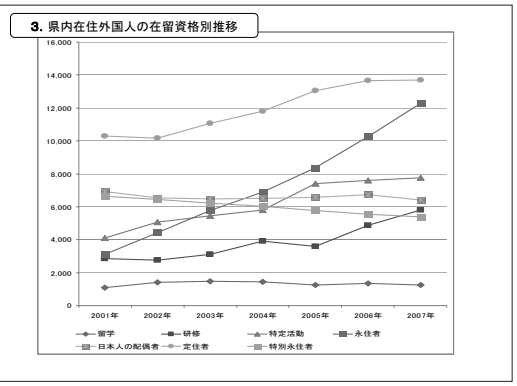
2. 上位4カ国の外国人登録者数の推移【岐阜県】

外国人登録者の国籍別では、**ブラジルが2万118人で全体の35．1パーセント**を占め、**以下、中国、フィリピン、韓国・朝鮮**と続いている。
（1）**ブラジル**は、平成11年以降増加を続けてきたが、**平成19年9月末**から減少に転じ**ている。**
（2）**中国**は、このような情勢でも増加を続けており、平成20年末は**同19年末**に比べ**て、3．7%増加**している。
（3）**フィリピンは、毎年増加**を続けており、平成20年末は**同19年末に比べて、5．9%増加**している。
（4）**韓国・朝鮮**は、特別永住者数の減少を受けて、**毎年減少**を続けている。



昭和59年から平成19年までは、毎年12月末現在（法務省調べ）
平成20年は、12月末現在（岐阜県国際課調べ）

2



地域の思い

○国際交流
- ・既に日本にいる外国人と交流したい。
- ・言葉が出来ないので日本語で交流したい。
- ・在住外国人が何処にいるかわからない。

○国際協力
- ・何処の国の誰と一緒に協力活動していいかわからない。
- ・掘った井戸が活用されないなど、継続性が確保できない。

○多文化共生
- ・日本の情報を翻訳してくれる人や通訳がいない。
- ・日本と違う外国の文化風習がわからない。
- ・外国人コミュニティ側との接点がない。
- ・在住外国人の参加が少ない。

地域に住む外国人との課題

○地域住民との摩擦
- ・言葉が分からないことによるコミュニケーション不足
- ・文化・習慣の違いにより、在住外国人と日本人との互いの理解が困難
- → 特に、ゴミ出し、深夜の騒音、違法駐車など地域のルールが守られていない

○在住外国人の意識
- ・在住外国人が地域の集会や活動に参加する仕組みが不十分
- ・在住外国人側にも、日本の生活習慣になじもうとする意識が低い
- → 在住外国人は地域から孤立しがち

○行政情報
- ・必ずしも母語で情報が提供されていない
- （例）地震や台風などの防災情報や救急医療情報など、生命財産に関わる危機管理情報
- → 在住外国人が理解できないケースの存在

大学に対する期待

大学がもっと地域に参加して欲しい

○国際交流
- ・大学に来る外国人と交流したい
- ・日本語ができる留学生と交流したい

○国際協力
- ・大学と交流のある国で活動したい
- ・地元の協力者を紹介してもらい、継続性を確保したい

○多文化共生
- ・留学生に翻訳・通訳してほしい
- ・留学生が地域と外国人コミュニティ側のつなぎ役になってほしい
- ・教員養成課程の学生に現場を見て欲しい

国際化の流れ③

◆多文化共生へ

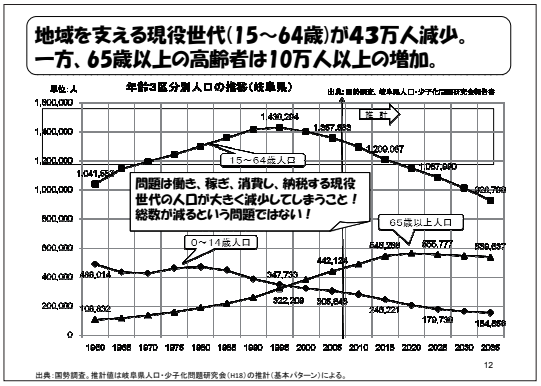
○国の指針
- 総務省「多文化共生に向けた取組の促進（地方行財政重点施策）」（平成17・18年）
- 総務省「多文化共生研究会報告書」（平成18年3月）
- 総務省「多文化共生研究会報告書」（平成19年3月）

○県の基本方針
- ・県内の在住外国人を、地域社会を構成する「外国籍の県民」として認識し、「言葉の壁」、「制度の壁」、「心の壁」を取り除き、県民が互いの文化や考え方を理解し、互いの人権を尊重するとともに、安心して快適に暮らすことのできる地域社会（多文化共生社会）の実現を目指す。

大学との交流の課題

○地域側の課題
- ・目的があいまいなまま依頼
- ・大学への要求が過大になる
- ・留学生＝ボランティア＝無償　で良いのか

○大学側の課題
- ・研究成果として大学にのみ貢献
- ・送り出す学生や留学生の事前準備
- ・大学としての継続性



課題の解決に向けて

○ 大学の専門性を活かす
- ・どの分野に参画するか、してもらうか

○ 互いのメリットを考える
- ・留学生はボランティアか
- ・研究成果を地域に還元できないか

○ 継続性を考える
- ・代表や教授が代わっても継続できるように

発表（自治体）

岐阜市の国際交流と多文化共生

岐阜市市民参画部国際課　**山　本　哲　也**

【司　会】 山本哲也様は、1995年より岐阜市役所に勤務され、2年前から国際課地域国際化推進グループの副主査として、多文化共生関連事業、国際交流ボランティアの管理、それから岐阜市国際交流協会の事業等を担当しておられます。

本日は岐阜市の「国際交流と多文化共生」と題しましてお話しをいただきます。それでは、よろしくお願いいたします。

****

皆さん、こんにちは。僭越ながら壇上から失礼いたします。

ただいまご紹介いただきました岐阜市国際課の山本と申します。何分にもこういった場での発表とか発言というのが初めてなので、なかなかお聞き苦しい点があるかと思いますけれども、その辺はご容赦いただければと思います。

それでは、本日は「岐阜市の国際交流と多文化共生」というテーマで、①岐阜市の外国人登録の現状、②岐阜市の国際化に関する基本方針、③国際交流、④多文化共生ということでお話をさせていただきます。

①岐阜市の外国人登録の現状

初めに岐阜市の外国人登録の現状ですけれども、グラフは国籍別の外国人登録者数の推移になっております。1995年に5,036人という人数から、2007年末には9,344人と、約1.9倍の増加をしております。この外国人の方が岐阜市の総人口に占める割合が2007年末で2.2％ということで、岐阜県全体では2.7％とそちらよりは低いんですけれども、全国平均の約1.7％よりは高い状況になっております。

国籍別では、1995年に全体の約半分を占めておりました韓国及び朝鮮の方、2,341名いらっしゃったんですけれども、この方々は1,703名に減少し、代わって中国の方が1,032人から4,469人、フィリピンの方が510人から1,853人にと増えております。

ちなみに2009年１月末現在で9,067人ということで、今、若干ですけれども減少傾向にあります。対人口比についても2.1％という内訳になっております。

次のグラフは在留資格別に見ました外国人登録者数です。韓国・朝鮮の方の主な在留資格である特別永住者が減少する一方、特別永住者以外で定住者、永住者や日本人の配偶者等といった就労や活動に制限のない資格の方と、研修及び特定活動、この特定活動は岐阜市に多い技能実習生の方の主な資格なんですけれども、こういった資格の方が増えております。

この二つのグラフと、その他いろんな状況を踏まえた岐阜市の登録の状況ということなんですけれども、韓国・朝鮮の方が減る一方で、中国とフィリピンの方が大幅に増加しております。これらの国籍の方で全体の約86％を占めております。これはブラジルの方が多いと、先ほど新田さんのお話にもありました岐阜県下の状況であるとか、岐阜県にも外国人の方の多いという市が他にも幾つかあるんですけれども、そういったところとはちょっと状況が違っております。また、全体の半数を占める中国の方のうち、７割弱が研修生、特定活動という技能実習生の方になっております。フィリピンの方のうち８割強の方が永住者・定住者等といった就労の制限のない在留資格ということになっております。

これらが岐阜市の外国人登録の特徴というこ

となんですが、これは先ほど新田さんの話でもちょっと出たんですけれども、あくまで登録のある方ということで、登録を残したままいなくなった方もいらっしゃいますし、あとは、日本国籍をお持ちのダブルとかミックス、そういった方も入っておりませんので、実際の状況というのはちょっとこの数字だけでは追えない部分がありますので、ご留意いただければと思います。

②岐阜市の国際化に関する基本方針

こういった状況にある岐阜市ですけれども、岐阜市の国際関係についての基本方針としまして、平成14年９月に岐阜市国際化指針というのを策定しております。これは市民との協働を基本理念としまして、多様な文化が共生し、個性的で活力あふれる都市を目指して、国際化に対応するまちづくりを進めていく上での姿勢の基本方針になっております。

こちらでは、目指すべき都市像のキーワードとして「共生」「個性」「活力」の三つ、その目指すべき都市像実現のための仕組みづくりとしまして、「国際交流、国際協力・協調」「人づくり」「体制づくり」「空間づくり」の四つの取り組みを掲げております。これが全体のイメージですね。

③岐阜市の国際交流

この都市像実現のための仕組みづくりにもうたっております国際交流についてちょっとお話をさせていただきます。

特に友好姉妹都市を軸としました国際交流についてということで、友好姉妹都市提携に至る経緯はそれぞれ都市ごとにあるんですけれども、友好姉妹都市のあり方としまして、かつての国際親善というものから、より具体的で実のある交流へというシフトが、今、求められております。

この図（スライド）は岐阜市の友好姉妹都市を世界地図に載せたものなんですが、須永先生や新田さんの方からもご紹介いただいていますとおりです。1978年のイタリア・フィレンツェ市を皮切りにしまして、現在は世界の６都市地域と提携を結んでおります。これらのうち、最も交流が盛んである中国の杭州市を例にとってお話をさせていただきます。

提携経緯としましては、1953年、終戦後、日本各地で中国人殉難者の遺骨送還運動が起こりまして、日中の往来がまた始まったわけなんですけれども、1962年、岐阜新聞社社長を団長とする訪問団が杭州市を訪問しました。そこで両市は平和と友好を誓いまして、日中不再戦の碑文を交換。翌年、両市の公園にそれぞれ碑が建立されるということで、しばらく時を経て、1978年、中国の杭州市から友好都市提携の申し入れをいただきまして、79年２月に岐阜市において友好都市提携調印を行っております。これが須永先生の発表の中にもありました日中不再戦の碑ということで、日中国交正常化（1972年９月、田中角栄内閣）のおよそ10年前に行われたということで、日中関係の中でも本市の国際交流としてのちょっとした自慢かなと思います。

（スライド）左側の写真が、杭州市の日中不再戦の碑です。右側の写真のが岐阜市にある日中不再戦の碑で、岐阜公園の中の日中友好公園というところにこの碑文があります。

こうして民間や友好交流から始まった杭州市との関係でしたけれども、現在はより具体的なものとしようということで、2003年の杭州市友好代表団が岐阜にお越しになった際に、各分野における今日的課題に対する相互補完、協力、支援について、備忘録という形で明文化しました。その友好備忘録は全部で五つの柱ということで、「経済貿易交流の促進」「双方の観光を促進」「公務員交流の促進」「青少年交流の推進」「都市建設、都市管理部門の交流を促進」をうたっております。以下、具体例は時間の都合で省略します（職員交流、青少年交流、産業交流、学術交流）。

以上が杭州市との交流なんですけれども、その他の都市でも、先ほどの岐女短であるとか岐阜大学等の学術交流ということで、友好姉妹都市にある大学との連携等は図っていただいてお

ります。

④岐阜市の多文化共生

4番目ということで、新田さんもお話しされておりました今日的課題でもあります多文化共生ということです。ちょっとお伺いしたいんですが、「多文化共生」という言葉を知っている、意味もわかるという方、挙手いただけますか。

（会場3割程度挙手）はい、ありがとうございます。

今だんだん、これは今日的課題ということでいろんなところでうたわれているんですけれども、例えば埼玉県がインターネットの県政モニターに調査をしたときには、多文化共生という言葉を聞いたことがあるというのは4割の方だけでした。静岡県も同様に年末ぐらいにインターネットでの調査をしましたところ、多文化共生の言葉の意味も言葉も知っているという方は4割ぐらいということで、まだまだ僕らが力を入れたいなぁと思っていることは周知が図られていないのかなぁというふうに思います。

この多文化共生推進の取り組みのうち、コミュニケーション支援、生活支援等ということで、現在の取り組み例を五つ挙げさせてもらいました。

コミュニケーション支援の中で、少ないながらも多言語情報提供ということで、市行政からの情報を多言語化したものが幾つかございます。

二つ目が外国人相談窓口ということで、母語での対応ができる相談窓口を、今、岐阜市では4言語対応させてもらっています。タガログ語というのはフィリピンの方でよく使われる言語で、あとはポルトガル語、ブラジルで使われる言葉は各週1回ずつということですけれども、今、4言語対応させてもらっております。

そのコミュニケーション支援で、日本語講座の支援ということで、これは岐阜市の国際交流協会という外郭団体で主に進めておりますが、幾つかの日本語講座、日本語教授法講座などをやっております。先ほど壇上に上がられまして、いろんな顔をお持ちの加藤先生ですけれども、ここでも教えていただいております。ありがとうございます。

それから生活支援ということで外国人児童支援。これは各小・中学校にタガログ語、中国語、スペイン語ができる指導員を派遣しまして、授業の補助、あと日本語指導などを行っております。これは市の事業なんですけれども、岐阜県からポルトガル語の指導員の派遣をいただいております。

それから主に中国人の研修生、技能実習生を受け入れる企業や受入組合からの依頼を受けまして、出前講座ということで、消防や防災、交通安全等についての講習会を職員派遣ということで対応させてもらっております。

岐阜市多文化共生推進等基本計画

こうした多文化共生推進に関しまして、本市では、先ほど説明させてもらいました平成14年9月策定の岐阜市国際化指針を基礎にしつつ、一つ目として外国人市民の実態や意向を把握し、二つ目として多様なセクターと協働して推進するための仕組みづくりを進めながら、「生活者としての外国人」の視点から、民族、国籍や言語等の多様性を認め合い、ともに生活していける社会づくりを目指した取り組みを行うための基本計画、岐阜市多文化共生推進等基本計画を平成21年度に策定予定です。

この策定に際しまして、まず外国人市民の実態、意向把握、次に多様なセクターとの協働というのを進めながら、今年度は外国人市民生活実態調査というのを全部で四つ行っております。岐阜大学教育学部との共同研究という形で二つ、岐阜市の外国人登録者のうち三つの条件を満たす方から1,500名を無作為抽出しての郵送アンケート、それから日本語講座、国際交流イベント等、外国人の方が心を開いている場で直接の聞き取りを行う聞き取り調査ということで、これらの2点を今、岐阜大学と一緒にやらせてもらっております。現在は取りまとめで、担当の先生方、ものすごく必死に頑張っていただいているところなんですけれども、ちょっと結果が楽しみです。

その他、ＮＰＯ等への委託で二つ、岐阜市に登録のある外国人の方の約３割を占めております研修生及び技能実習生に関する生活実態調査ということで、これは雇用者側である雇用企業、派遣組合、団体向けの郵送アンケートと、被雇用者である研修生等への直接の聞き取り調査の両面から行っております。郵送のアンケートにつきましては、市内にあります中間支援組織という色々な提言をいただく団体があるんですが、そちらへの委託、２番目の聞き取り調査についてはＮＰＯへの委託ということで、それぞれの特徴を生かした調査をしていただいております。

これらの調査なんですけれども、質問事項を策定する段階から岐大やＮＰＯ以外にもいろんな立場の方からの御意見をいただいて、協働という形をとりながら進めております。これがその全体の図になります。

キーワードは「協働」

最後に、本市の国際交流や多文化共生推進のためのキーワードとして「協働」という言葉を挙げたいと思います。特に多文化共生の分野では、残念ながら行政だけでやるというのは不可能なんです。基本計画を策定した後、各種事業の実施に際しましても、外国人市民の方自身はもちろんですけれども、大学やボランティア団体、あと地域や他の自治体等と日ごろから顔の見える関係をつくりながら、協働して取り組めるような体制づくり、そういったものができればいいなぁというふうに考えております。

組織と組織、人と人、そういったつながりや協働こそがこれらの推進のためのかなめかなぁというふうに考えております。このフォーラムが国際交流や多文化共生における、まず大学と行政ということなんですけれども、その他地域等との交流の場にもなればなぁという期待をして、締めさせてもらいます。

以上、ご清聴、ありがとうございました。（拍手）

****

質疑応答

【フロア質問者】 郡上の長谷川と申します。

14ページの外国人相談窓口のところですけど、例えば郡上市の市役所の窓口へお客さんが見えたときに、そこで説明ができないような場合に、岐阜市の方へ連絡させてもらって応援していただくということはできるんですか。

【山本哲也氏】 ある程度はやらせてもらえると思います。電話で対応ということなので、代わって、代わってということになるんですけれども。

【フロア質問者】 そういう事態にお願いすることがあったら対応していただけるということですね。

【山本哲也氏】 はい。

【フロア質問者】 ありがとうございます。

【司　会】 よい機会になってうれしいと思います。

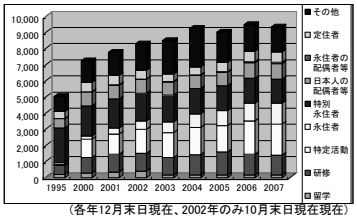
【山本哲也氏】 今のでちょっとだけ補足なんですけれども、岐阜県の外郭団体である県の国際交流センターが、岐阜県内にあります外国人相談、多言語で対応できる窓口の一覧というのを作っておりまして、そういったものが準備されておりますので、今の本市の対応できる言語以外でも他市でやれるものについては情報提供いただけるかと思いますので、ご参考までに申し上げます。

岐阜市の
国際交流と多文化共生

2009.2.27
岐阜市
市民参画部国際課
山本　哲也

1　岐阜市の現状

②在留資格別外国人登録者数



（各年12月末日現在、2002年のみ10月末日現在現在）

〈減少傾向〉特別永住者
〈増加傾向〉上記以外の活動に制限のない資格、研修、及び特定活動

本日の内容

1　岐阜市の現状
2　岐阜市の基本方針
3　国際交流
4　多文化共生

1　岐阜市の現状

岐阜市の特徴

・韓国・朝鮮が減少する一方、中国とフィリピンが大幅に増加
　※これらの国籍で全体の9割弱を占める
・全体の半数を占める中国のうち、7割弱が研修・特定活動(その他、永住者・定住者等の就労制限のない資格者も増加)
・フィリピンのうち、8割強が永住者・定住者等の就労制限のない在留資格

1　岐阜市の現状

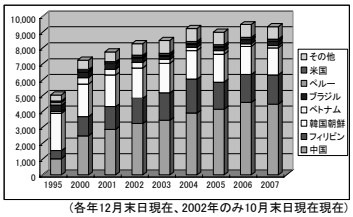
1　岐阜市の現状

2　岐阜市の基本方針

2　岐阜市の基本方針

1　岐阜市の現状

①国籍別外国人登録者数



（各年12月末日現在、2002年のみ10月末日現在現在）

〈減少傾向〉韓国及び朝鮮
〈増加傾向〉中国、及びフィリピン

2　岐阜市の基本方針

岐阜市国際化指針

市民との協働を基本理念として、
「多様な文化が共生し、個性的で活力あふれる都市」をめざし、国際化に対応するまちづくりを進めていくうえでの市政の基本方針

（平成14年9月策定）

2 岐阜市の基本方針

めざすべき都市像

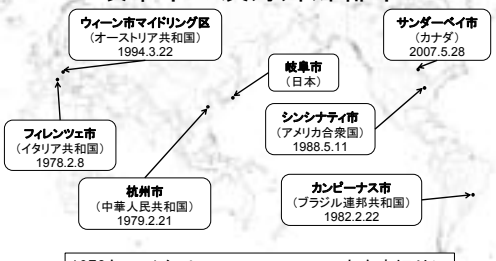
〈共生〉わかりあいともにつくるまち
〈個性〉世界の中でキラッとひかるぎふらしさ
〈活力〉イキイキ元気、国際化を活かすまちづくり

【都市像実現のためのしくみづくり】

〈国際交流、国際協調・協力〉
共生、個性、活力を醸成する国際交流、国際協調・協力を推進
〈人づくり〉
国際化時代を担う人材を育成
〈体制づくり〉
市民と協働して国際化に対応するための体制を整備
〈空間づくり〉
国際化に対応するための拠点整備など、
国際都市にふさわしい空間を創出

3 国際交流

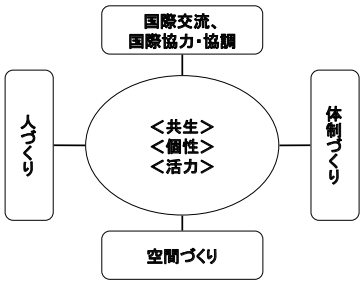
岐阜市の友好姉妹都市



1978年のイタリア・フィレンツェ市を皮切りに、
世界6都市地域と友好姉妹都市提携

2 岐阜市の基本方針

国際化指針　取り組みのイメージ



3 国際交流

友好姉妹都市との交流例　杭州市

【提携経緯】

1953年頃　日本各地で中国人殉難者の遺骨送還運動。
日中の往来が始まる。

1962年　岐阜新聞社社長を団長とする訪問団が
杭州市を訪問。両市は平和と友好を誓い、
「日中不再戦」の碑文を交換、翌年両市の
公園にそれぞれ碑が建立される。

1978年　杭州市から友好都市提携の申し入れ

1979年　岐阜市において友好都市提携調印

3 国際交流

3　国際交流

3 国際交流

日中不再戦の碑

日中国交正常化のおよそ10年前に行われた。
中国と日本の民間交流、友好交流の先駆け。
両市の友好関係もこれを機に始まった。

【杭州市にある日中不再戦の碑】

【岐阜市にある日中不再戦の碑】
※中日両国人民世世代代友好下去
「中日両国人民は子々孫々にわたって
仲良くやっていきましょう」の意

3 国際交流

友好姉妹都市を軸とした国際交流

・友好姉妹都市提携にはそれぞれの経緯
・友好姉妹都市のあり方
「国際親善」⇒より具体的で**「実のある交流」**へ

・自治体間交流（協力）
・青少年交流
・産業交流
・文化交流
・学術交流　など

3 国際交流

備忘録の作成

2003年の杭州市友好代表団来岐時、各分野における
今日的課題に対する相互補完、協力、支援について
備忘録を取り交わした。

【岐阜市・杭州市　友好備忘録】

1. 経済貿易交流の促進（アパレル関係産業の交流）
2. 双方の観光を促進（双方で観光客を積極的に受入）
3. 公務員交流の促進
（両市職員の研修交流の継続。相互派遣双方の理解と協力を深める）
4. 青少年交流の推進（積極的に青少年の各分野における活動の推進）
5. 都市建設、都市管理部門の交流を促進
（双方の先進的経験を学ぶ）

3 国際交流

職員交流

2003年の備忘録により、

「岐阜市－杭州市職員相互派遣事業」を開始。

・2003～2006　経済・観光分野

・2007～　　環境分野　1年毎の相互派遣

【2007年度　受入】

【2008年度　派遣】

3 国際交流

その他の交流

・青少年交流

青少年友好訪問団の相互派遣

市立岐阜商業高校の修学旅行での友好校訪問

・産業交流

中国国際レジャー産業博覧会、中国国際シルク博、女装展などへの出展

・学術交流

岐阜市民病院と

杭州市第一人民医院との交流

4 多文化共生

4　多文化共生

4 多文化共生

現在の取り組み例

①多言語情報提供

②外国人相談窓口の開設

③日本語講座の支援等

④外国人児童への就学援助

⑤出前講座での職員派遣

4 多文化共生

取組み例①　多言語情報提供

・外国人生活ガイドブック(5ヶ国語)

生活する上での基本情報を網羅

・ゴミ出しルール(5ヶ国語)

・市民税Q＆A(3ヶ国語)

・救急隊用

指差し救急シート(6ヶ国語)

・外国語版岐阜市地図

4 多文化共生

取組み例②　外国人相談窓口

・英　語：月曜～金曜日の9時～16時

・中国語：月曜～金曜日の9時～15時30分

・タガログ語：毎週火曜日の10時～16時

・ポルトガル語：毎週水曜日の10時～16時

※市役所各窓口での手続きの他、各種相談に対応中。

4 多文化共生

取組み例③　日本語講座の支援等

・日本語講座

・日本語教授法講座

・日本語ボランティア団体へ助成金交付

※(財)岐阜市国際交流協会関連事業

4 多文化共生

取組み例④　外国人児童支援

タガログ語(2名)、中国語 及びスペイン語(各1名)の指導員を小中学校に派遣、各教室での授業の補助と日本語の指導を行う

※岐阜県にポルトガル語指導員派遣を依頼

4 多文化共生

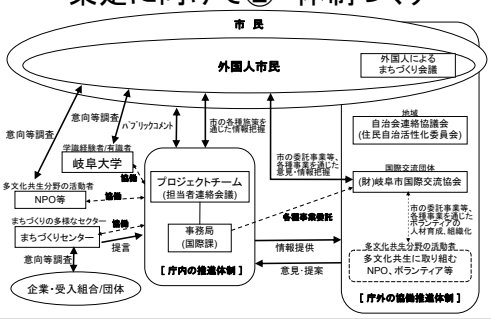
取組み例⑤　出前講座での職員派遣

消防・防災、交通安全や食中毒についての講習会に、生涯学習の出前講座制度を利用して消防職員などを講師として派遣

※主に研修生、技能実習生を受け入れる企業や受入組合からの依頼

4 多文化共生

策定に向けて②　体制づくり



4 多文化共生

岐阜市多文化共生推進等基本計画

平成14年9月に策定した「岐阜市国際化指針」を基礎にしつつ、

①外国人市民の実態や意向を把握し、

②多様なセクターと協働して推進するための仕組みづくりを進めながら、

「生活者としての外国人」の視点から、民族、国籍や言語等の多様性を認め合い、共に生活していける社会づくりを目指した取組みを行うための基本計画を平成21年度に策定予定

最後に

キーワード「協働」

4 多文化共生

策定にむけて①
外国人市民生活実態調査

（1）岐阜大学教育学部との共同研究

①郵送アンケート
岐阜市の外国人登録者のうち、以下の条件を満たす方から1,500名を無作為抽出
- ・20歳以上
- ・滞在1年以上
- ・在留資格：特別永住者、研修、特定活動 以外

②聞き取り調査
日本語講座、国際交流イベントの場などでの直接の聞き取り調査

4 多文化共生

策定にむけて①
外国人市民生活実態調査

（2）NPO等への委託

岐阜市登録外国人の約3割を占める研修生及び技能実習生に関する生活実態調査

①雇用企業、派遣組合/団体向け郵送アンケート

②研修生等への直接の聞き取り調査

発表（自治体）

各務原国際協会の これまでの取り組みと今後の課題

各務原市産業部観光交流課　**奥　村　和　彦**

【司　会】 奥村和彦様は各務原市のご出身で、1987年（昭和62年）より各務原市役所に勤務され、今、話題になっております国民年金課とか市民税課とか、それから水と緑の推進課を経られまして、本年度より観光交流課の観光交流係長として国際交流に携わっておられます。

本日は「各務原国際協会のこれまでの取り組みと今後の課題」と題しまして発表いただきます。よろしくお願いいたします。

****

ただいまご紹介にあずかりました各務原市役所観光交流課の奥村と申します。よろしくお願いします。

今回は国際協会の立場としてお話しさせていただきます。私は立場としては市役所の職員ではありますが、各務原国際協会、市役所とは独立した団体ではありますが、実際に事務をする者がおりませんので、各務原市役所の観光交流課の交流係の職員、私ともう一人の人間が事務局を兼ねるという形でやっております。

各務原市国際協会（KIA）

各務原市国際協会は設立が昭和61年です。目的は、この当時はまだ大量の外国人が入ってくる入管法改正の前でしたので、経済、学術、文化の幅広い国際交流、国際化に対応したまちづくり、ひいては国際親善、国際平和に寄与したいというような目的で設立されまして、多文化共生というような言葉はこの当時は入っておりません。ちなみに、現在、会員数は大体350名ほど、大体これは毎年変わらない数字となっております。

当然ですが、事務局の職員が２人しかいなくて、しかも市役所の仕事をしながら、ある意味、言い方は悪いですけど片手間でやっているような形になりますので、それを支えるボランティアの方の存在というのは欠かせないわけです。

KIA を支えるボランティア

まず企画運営ボランティアというのがありまして、どうしても同じ職員だけでやっていますと発想も固まってきてしまうようなところがありますので、企画運営のボランティアを募集していまして、そういうボランティアの方にいろいろなアイデアを出してもらって、できるだけ新しいものをやっていこうというようなことをやっております。

それからホームステイボランティアというのもありまして、交流ですからほかの海外の都市からホームステイ、各務原市に滞在される方が見えるわけですけど、そういうときにホームステイするボランティアの方をお願いしたりしています。

それから通訳ボランティアなんですが、これは主に国際ホッケー大会で活躍していただいております。各務原市は非常にホッケーが盛んで、アジアでも有数のホッケー施設であるグリーンスタジアムというホッケー施設があるんですが、それで大体平均すると２年に１回ぐらい大きな国際大会があります。最近では北京オリンピックの男子のアジア最終予選がありました。そのときに８ヵ国ですか参加しましたので、そのホッケーの通訳ボランティア、国際ホッケー大会の通訳ボランティアというのを募集して活躍していただきました。

それからあと日本語支援ボランティアということなんですが、これは外国籍住民、日本語がほとんどできない外国籍住民の方への日本語支

援、日本語を教えるボランティアですね。

最後に、災害語学ボランティアというのも募集しているんですが、実は災害に対する対応というのはまだ非常にできていないような状況でして、残念ながらまだほとんど登録だけで活用されていないというのが現状です。

KIA の主な事業

各務原市国際協会の主な事業としまして、大きく分けると、海外文化の紹介、国際交流、それから多文化共生事業が挙げられるのではないかと思います。これはこういう三つの観点から事業を進めているというわけではなくて、たまたま今回発表がありまして、そういえばうちって何をやったのかなといろいろ調べてみましたら、こういうのが大きな三つの事業なのかなというような感じのものです。

①海外文化の紹介事業

まず海外文化の紹介ということなんですけど、まず最初に大きなものとしては各種語学講座というのがあります。やっぱり一番人気のあるのは英語の講座でして、これは人数も多いものですから、初級、中級、上級というふうに三つの級、それぞれ２クラスずつということで、しかも年間大体通して全32回ということで、これは100名を超える講座受講生がいつも見えます。あとは韓国語講座とか中国語講座がそれぞれ少しあります。実はうちの方はポルトガル語相談員が２名いますので、ポルトガル講座もできるんですが、それは市役所すぐ北に２、３年前に中部学院大学というのが開校しまして、そこでポルトガル語講座をやっていますので、あえてうちの方ではやっておりません。

それから番外編としましては、イングリッシュ・バスというのがありまして、それはどういうのかといいますと後でちょっと説明します。まずこれ（スライド写真）は国際協会主催の英会話教室の、これは上級者なんであまり人数はおりませんけど、一番多いのが中級者で、そこですと１クラス30名を超えるような生徒数になっております。ついでに課題を一つ申し上げますと、いつも受ける方が初級から、２、３年とかかかってもいいんですけど初級から中級、中級から上級、やがては自分で勉強するようになって、新たな人が入ってくるというふうにどんどんとすそ野が広がっていけばいいんですけど、現状はなかなかそうでもないようなところがありまして、毎年同じような人が初級を受けていたりとか、例えば自分の友達が初級を受けているから、かなりしゃべれるんだけどいつも初級にいるとか、私の好きな先生が初級にいるからその初級にいるとか、そういう方も何か見えるみたいで、その辺がちょっと問題といえば問題であります。

それから、これ（スライド写真）はイングリッシュ・バスというやつなんですけど、ちょっと見えないですけど、こちらがアメリカ人です。２、３名ほどアメリカ人とか、要は英語圏の人に入ってもらって、ただ単にバスで旅行するんじゃなくて、そのバスの中では英語しか話さないよというルールで、できるだけ英語に親しんでもらう環境をつくるというイングリッシュ・バスツアーというのを２年ぐらい前からやっていまして、非常にいつもこれは好評です。これも一つの語学講座の番外編みたいな感じでやっております。

それから、あと文化紹介としては、これはどうしてもワンパターンになってしまうんですが、料理を通した海外文化紹介ということです。うちの方の国際交流員がどうしても英語圏の者なんで、クッキング・イン・イングリッシュということで、アメリカ料理を中心に紹介しておりまして、これは国際協会の行事ですので、ただの料理講座には終わらないようにということで、一応、案内についてはすべて英語で発送、日本語の訳はつけていません。レシピなんかもすべて英語で書いて当日やっております。当然、なかなかその英語は皆さん達者なわけではありませんので、わからなければ日本語でも説明を交えてということで、できるだけ英語にも親しんでいただこうということでやっております。

そのほか、こちらにインドネシア料理とか、例えば一番最後にモンゴル料理なんてあります

けど、なかなかこういうのはうちの方も非常に困るところで、いつもいろんな大学の留学生の方、たまたまつてがあったりするとそういう方を引っ張ってきて、その国の料理を紹介してもらっております。どうして料理になってしまうかというと、どうしてもこういうのに来てくれる方というのは主婦層の方が中心になりますので、どうしても料理が中心になって、ただ料理を楽しむだけではやっぱり海外文化紹介にもなりませんので、最後、料理が終わった後に例えばスライドで、こんなようなスライドでその国の事情なんかをいろいろ紹介していただいたりとかいうことで、少しでも国際理解をしていただくようなふうには努めております。

ちなみにこれ（スライド写真）がクッキング・イン・イングリッシュの様子なんですけど、これが英語のレシピなんです。まだつくり始める前ですね。皆さんで見ていただいて、わからなければ、一応、この外国人講師、日本語もしゃべれますので、どうしてもわからなければ日本語で説明するというような形で、少しでも英語に親しんでいただけるようなつもりでやっております。

これ（スライド写真）はちなみにスコットランド文化紹介ということで、こちらはスコットランドの方、たまたま見つかって呼んできまして、これはいわゆる３時の紅茶のお菓子をみんなでつくって、飲んで、その後、いろいろまたスコットランドの文化を紹介していただいたりというようなことです。

②国際交流事業

国際交流事業としましては、先ほども言いましたけど、一番上にあります男子ホッケーオリンピック予選、これは今年やった事業です。男子ホッケーオリンピック予選の通訳の方で支援しました。

それから６月､セリトスというのはアメリカ・カリフォルニア州のセリトス市というところなんですが、そこから高校生８人の方が見えましてホームステイをやりました。

それから日本人ブラジル移住100周年記念イベントというのが美濃加茂で去年ありまして、それの方も支援させていただいております。

それから、あと順番に紹介していきますが、下から二つ目の英語スピーチコンテスト、これは何で国際交流事業に入っているかというと、これは中学生と高校生を対象にしたスピーチコンテストなんですけど、中学生はここのスピーチコンテストで上位入賞しますと、翌年は、毎年、秋に中学生の子を30人、アメリカの、こちらにありますカリフォルニアのセリトス州と、下にあるユタ州のカナブ市というところなんですけど、ここに１週間、ホームステイの海外研修というのがありまして、それに推薦で行けるんですね。そういうことで、そういうちょっとニンジンをぶら下げるような感じになりますけど、それで特に中学生の方は一生懸命になって英語スピーチコンテストに出て、何とかそういう切符を手に入れたいということで頑張っております。

これ（スライド写真）がホッケーオリンピックの予選の様子ですね。こちらの方が選手です。ちょうどこれはバスから降りたあたりぐらいですね。こちらに見えるのが通訳ボランティアの方ですね。この方はたしかドイツかスイスだったと思います。当然、英語も、英語は割とできる方が多いんですけど、通訳のボランティアの方が、皆さん日本語ができないので、英語でいろいろ身の回りのサポートをしたりしております。

それから、これ（スライド写真）がセリトスの方と、それからホームステイの方も一緒に招いて、木曽川で鵜飼いをしたときの様子です。ぱっと見るとどの方が外国人かなとわからないかと思いますが、セリトス市というのは非常に移民の方、特にアジア系の移民が多いところでして、来た方もインド系だったりベトナム系だったり、そんな感じですので、例えばこの方はインド系だったかな。その隣が、この方が中南米系、こちらも中南米系ですかね。ぱっと見にはだれが外国人かよくわからないような感じなんですけど、こんなようなこともしております。

それから、これ（スライド写真）は学びの森フェスティバルというのが11月、これが非常にこちらの岐阜大学とかかわりの深いところなんですが、これは昔、各務原市に岐阜大学の農学部がございまして、その跡が今「学びの森」という名前の公園に変わっております。そこでやったフェスティバルで英語を使ったアメリカの遊びをやろうということでやったのがこれの様子です。

それからこれ(スライド写真)はサンタクロースの訪問事業。これが、この方がサンタクロースなんですが、いわゆるこの辺の方が変装して来たんじゃなくて、アメリカの先ほど言いましたセリトス市というところの、この方はロータリークラブの方なんです。この方は、当然、子供が見てまず外国人だというのはすぐわかるんですね。白いほほひげも、これは本物のひげでいつもこの日のために４月ぐらいからずっと伸ばしているんです。なおかつ、体格が大きくて太鼓腹なんですね。いわゆる本当にサンタクロースというイメージにぴったりな方なんです。ですから、この方が来ると本当に子供たち、すごくびっくりして、本当にサンタが来たんだという感じで、すごく喜んでくれます。毎年好評なんで、今年で４年ぐらい続いていますかね。これがプレゼントをお渡ししている様子です。

今年は、多文化共生ということもちょっと頭にありましたので、今まで各務原市内にブラジル人学校があったんですけど、せっかくですからということで、サンタクロースにブラジル人学校の方に訪問していただきまして、ちょっと見にくいんですが、こちらがサンタクロースです。ちょっと隠れてしまっていますけど。非常に皆さん、喜んでいただきましてよかったと思っています。

あともう一つ、今までは、おととしまでは保育所しか行っていなかったんですが、ことしはそのブラジル人学校と障害者施設の福祉の里の方も訪問しました。これは福祉の里のスタッフの方ですね。子供だけじゃなくて、大人もだれも、この方が行くところは皆さん本当に笑顔になりまして、この方は皆さんを幸せな気持ちにさせる不思議な力があるというふうに感じております。

これ（スライド写真）がその福祉の里での様子です。小さいお子さん方が、障害を持ったお子さん方で、大人がその保護者というような感じです。

最後に、こういうような形で、いつもクラスごとにプレゼントをもらった後に記念撮影を撮ったりするんですが、実はいつも本当に喜んでいるのはどうも保育士の方のようで、いつも最後に保育士の方が子供たちにお断りして、先生たちのお時間をちょっとだけちょうだいねと言って、最後にサンタクロースの方と記念写真を撮るんですけど、一番うれしそうなのは子供たちよりもむしろ先生方のような気がします。

これ（スライド写真）が英語スピーチコンテストの様子ですね。高校生のメリット、目に見える形のメリットは名誉ぐらいしかないもんですから、入賞者というのは今年なんですけど、この２人だけです。あと残りはみんな中学生です。ここでこういうふうに入賞しますと、来年の中学生の海外派遣の推薦枠がもらえるということで、皆さん、頑張っていただいております。

③多文化共生事業

あと最後に多文化共生事業についてちょっと説明させていただきたいと思いますが、各務原市の方は、この多文化共生事業というのは実はおくれているのかなというのが正直な感想です。今やっているのは、主なものはこの三つなんですが、まず最初に日本語講座というのを、これは外国人を対象にした日本語講座なんですけど、これをやり始めてまだ２年たっておりませんね。１年半ですね。しかもうちの方は会場もないものですから、一つ場所を借りて、毎週水曜日の夜やるのが限界というのが残念ながら今の状況です。

ノヴァエタッパというのが各務原市にある唯一のブラジル人学校で、こちらの支援を今年の１月から12月までやることにしました。内容についてはまた後で詳しく説明します。

それから、外国人児童とか、実際に各務原市

に住んでいる方に少しでも日本語を学ぶきっかけをつくっていただこうということで、日本語スピーチコンテストを今度３月にやる予定でおります。

ちなみに日本語の講座ですね。今のところ講師が30名弱ということですね。受講者は、一応、マン・ツー・マン形式で教えております。どうしてもレベルが受ける生徒によって違うものですから、いろいろ試行錯誤した結果、やっぱりマン・ツー・マン形式でやるのが一番いいだろうということで、一遍にたくさんの人を教えられませんけど、これが今のところ一番いい方法なのかなと思っています。先ほど言いましたように毎週６時から９時までやっていまして、開始時間は６時、７時、８時の三つから選択で、１回につき１時間コースということでマッチングをするんですけど、受講する人は何時からが都合がいいかというのをうちの方が聞きまして、講師の人も会社が終わってから来る方も見えますので、７時からの方がいいとか、８時からなら教えられるとか、そういう方が見えますので、それでそれぞれ合う方を合わせてやっております。課題としては、実は１月以降、やっぱり失業問題だと思うんですけど、日本語が話せないと就職するときにいろいろ困るということだと思うんですが、非常に申し込みがふえまして、今、35名待ちというような状態です。講師の方の供給が追いつかないので35名待ちのような状態になっています。それから、当然これはボランティアですので、講師の一人ひとりのスキルアップをどうしていくかというのも、これも一つの問題であります。あともう一つはその会場の確保。各務原国際協会独自のスペースというのはありませんので、ですから仮に講師の方がふえても、時間をふやしたりとか日にちをふやしたりできないというのが今の現状です。

あとブラジル人学校のノヴァエタッパの支援ですが、常時90名ぐらいで推移していた生徒が12月以降は急に激減していまして、現在40名ぐらいしかおらんと。教師も削減で14名から９名と書いていますが、この前聞いた話では、今さらに１人減って８名ということらしいです。これ実は、先ほど言ったノヴァエタッパを12月に訪問したとき、このときは12月のまだ頭ごろで、まだ学校の方も「多少は生徒は減っているけど」というような感じで、まだそんなには学校の方も深刻な事態だとは思っていなかったみたいなんですけど、年が明けてから急に状況が変わりまして、現在、これは園児ですね、小学生前の子たちなんですけど、このぐらいいたのが、今たったの３名しかいないというような状況になっております。

そういうことで何とかしてほしいということで来ましたので、急にうちの方も呼びかけをしまして、新聞とか各務原国際協会の会員向けのチラシで緊急食料支援というのを呼びかけました。要は給食にもお金がかかるので、その給食代だけでも少しでも浮けば助かるということだったので、まず最初に食料支援を呼びかけたら、年が明けた、急に状況がさらに悪化したものですから緊急募金の方も呼びかけました。宣伝までにちょっとこちらに載せさせていただいておりますけど、もしよろしければこういう形で募金していただけるとありがたいと思っております。

ちなみに、これ（スライド写真）は食料支援をやったときの様子なんですが、実は思ったほど集まらなくて、ちょっと私はがっかりしました。実はこれを思いついたのは、もう何年も前になるんですけど、ある弁護士の方があるアフリカのどこかの国に衣服を送ろうということで、要らない衣服を出してくださいということをやりましたら、皆さん、やっぱりタンスの中に着なくなった服っていっぱい持っているんですね。それをみんなでやっぱり要らないからということでいっぱい持ってきたんです。そのイメージがあったもんですから、多分お歳暮でもらったやつで、例えば缶詰をもらったんだけどこれって食べないよなとか、ノリをもらったけどうちはノリを食べないしとか、そういうのがいっぱいあるかなと思って呼びかけてみたんですけど、意外と思ったほど集まりませんでした。結局は、米が100キロとか、あとはこの辺にカップめんとかスパゲティーの乾めんとか、いろい

ろ集まったことは集まったんですけど、個人的にはちょっと失敗だったかなというふうに思っております。

これ（スライド写真）がノヴァエタッパの支援、今やっているやつですね。週２日間は日本語講師を派遣して日本語の授業をやっております。

それから、これは生徒の話なんですけど、一般のブラジル人のために土曜日に日本語の授業を今始めております。

それから、これもひょっとしたら当たり前で皆さんご存じの話なのかもしれませんが、例えばブラジル人でも、ブラジル人学校に通っている子供もいれば、公立の普通の学校に通わせている方もいるんですね。例えば小さいころから公立の学校に通っている子供というのは日本語については全然不自由ないんですけど、逆に親とのコミュニケーションができなくなるという問題がありますよね。うちの相談員も言っていたんですけど、子供が今小学生で、できるだけポルトガル語を忘れないようにということで家ではポルトガル語で話すようにしているんですけど、ポルトガル語で子供に何か話をしても、返ってくるのは日本語で返ってくるというようなことを言っております。そういうような子供のためにポルトガル語支援というのも土曜日にやっております。

これ（スライド写真）がその授業風景ですね。これが生徒さんで、こちらに日本語の先生です。これは逆に、ブラジル人児童を対象にしたポルトガル語の教室の様子ですね。

あと日本語スピーチコンテスト、これはことし初めての試みということでやってみました。一つには、外国籍市民にこの機会に少しでも日本語の能力を向上させるきっかけになってほしいなということと、多文化共生社会には市民の発掘ということで、うちはどこにどういう人が住んでいるのかやっぱりなかなかわからない状況にもなっていますので、これをきっかけに、こんなに日本語の話せる人が実はいたんだなというのがわかればいいかなというようなことで始めてみました。それは今度３月にあります。

今後の課題

今後の課題としては、協会の自立ということで、こういうふうに市の職員が片手間にやっているんじゃなくて、本当に一つの財団法人とかそういうような形で協会が独立できればいいなと思っていますし、災害ボランティアなんかの活用できていないボランティアがあります。

それから、あとは多文化共生事業に向けた取り組みで、日本語講座ですね。今、水曜日の夜しかやっていないんで、全然今追いつかないような状況ですが、これが充実できればということもあります。

それから外国籍住民との交流がほとんどできていない状況ですので、これも進めていきたいと思っていますし、外国人の問題が少しでも市政に反映できるような、外国人コミュニティがあって、市と常に連絡がとれるような体制ができればいいかなというふうには今思っております。

以上、つたない話ですが終わらせていただきます。どうも長い間、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

****

各務原国際協会（KIA）

・設立　昭和61年
・目的　経済、学術、文化の幅広い国際交流
　　国際化に対応したまちづくり
　　国際親善、国際平和への寄与
・会員数　347名(平成19年度)

海外文化紹介
・クッキング・イン・イングリッシュ
　隔月で開催
　英語を使った料理教室
・インドネシア料理（5月）
・スコットランド文化紹介（6月）
・サマーコンサート（7月）
・マクロビオティク料理(10月）
・モンゴル料理（3月）

KIAを支えるボランティア

- 企画運営ボランティア
- ホームステイボランティア
- 通訳ボランティア（国際ホッケー大会等)
- 日本語支援ボランティア
  (外国籍住民への日本語支援)

・災害語学ボランティア

国際交流事業

- 男子ホッケーオリンピック予選支援(4月)
- セリトス交流団受入(6月)
- 日本人ブラジル移住100周年
  記念イベント支援　(7月)
- 学びの森イベント参加(11月)
- サンタクロース訪問事業(12月)
- イヤーエンドパーティー(12月)
- 英語スピーチコンテスト（1月）
- カナブ交流団受入（4月）

KIAの主な事業

- 海外文化の紹介
- 国際交流
- 多文化共生事業

多文化共生事業

- 日本語講座(毎週水曜夜)
- ノヴァエタッパ支援（1月～12月）
- 日本語スピーチコンテスト（3月）

海外文化の紹介事業

- 各種語学講座
  1）英語講座　初級、中級、上級
　　各講座全32回　114名
  2）韓国語講座　15回　20名
  3）中国語講座　10回　20名
  ☆イングリッシュ・バス

ポルトガル語講座は中部学院大学にて開講

日本語講座

対象　外国籍住民
講師　ボランティア指導者(26名)
　受講者28名　マンツーマン形式の指導
開講日　毎週水曜夜6時から9時
　開始時間は6時、7時、8時の3つから選択
　1回の受講時間は1時間、1コース10回
課題　講師不足、講師のスキルアップ、
　　会場の確保

ブラジル人学校ノヴァエタッパ支援

ブラジル政府公認のブラジル人学校
- 設立　平成15年6月
  (翌16年にブラジル政府公認)
- 所在地　各務原市鵜沼山崎町
- 現状　常時90名前後で推移していた生徒が
  12月以降激減　現在40名程度
  教師も削減　14名⇒9名

今後の課題

- 協会の自立
- ボランティアの活用
- 国際化に対応した事業展開
  各種語学講座の充実
- 多文化共生事業に向けた取り組み
  日本語講座の充実
  外国籍住民との交流
  外国籍住民のコミュニティ形成

各務原国際協会の支援

- 緊急食糧援助（1月18日）
  新聞、KIA会員へのチラシで呼びかけ
- 緊急募金（1月～3月）
  事態の急激な悪化に対し、緊急決定
  振込での受付も可（3月まで）
  十六銀行　各務原支店　普通　854005
  大垣共立銀行　各務原支店　普通　468087
  岐阜信用金庫　各務原支店　普通　888437
  口座名義人　各務原国際協会
  （カカミガハラコクサイキョウカイ）

- 生徒への日本語授業支援
  週2日間　日本語講師の派遣
- 一般ブラジル人への日本語支援
  土曜開催　日本語講師の派遣
- 公立学校通学ブラジル人児童･生徒への
  ポルトガル語支援
  土曜開催
  公立学校に通学する生徒には母国語支援
  が必要

日本語スピーチコンテスト

今年3月第1回日本語スピーチコンテストを開催
- 目的　外国籍市民の日本語能力の向上
  多文化共生社会を担う市民の発掘
- 応募資格　市内在住または在勤で、
  日本語を母国語としない外国籍住民
  日本での滞在が延べ5年未満
- 児童の部、生徒の部、大人の部

質疑応答

【司　会】 それでは６名のご発表の先生方、本当に今日はありがとうございました。

時間が押しておりますけれども、全体を通しまして何かご質問がございますでしょうか。ご質問の時間に移りたいと思います。

【フロア質問者】 たびたび申しわけございません。愛知文教大学の稲熊と申します。

実はきょう参りましたのは、岐阜県、岐阜市、あるいは各務原市さんの方で大学の方と連携をされてどのような地域外国籍住民の支援をしていらっしゃるのかという、もうちょっと具体的なお話が伺いたかったんですけれども、不況によって、岐阜県内でもたしか美濃加茂とか可児の方では緊急支援講座というのをやっていますよね。そういったものを先生方の方ではどういったふうに取り組んでいらっしゃるのかということを一つ伺えたらありがたいんですけれども、よろしくお願いします。

【新田　豊氏】 まず岐阜県からご説明します。

言葉の支援の部分については、岐阜県の場合は財団法人岐阜県国際交流センターがありまして、そちらが行うというふうに役割分担をしております。この国際交流センターは、地域で日本語教室をやっていただくためには日本語教師を育成しないといけないんですけれども、なかなかプロになるような方を育成するのは日本語学校に行っていただかないといけないので、日本語のプロの方、例えば岐阜大学の日本語の先生に講師で来ていただいて、地域の日本語教室で日本語を教えている方に集まっていただいて養成講座というのをやっておりますが、そういうところで岐阜大学の先生にご協力をいただいております。

それからあとはアンケートとかいろんな調査報告を行うときには、もちろんいろんな大学の先生にコーディネーターとして参加していただくというようなことで取り組みをしております。

【山本哲也氏】 岐阜市です。

大学といいますと、先ほどの発表させてもらいました調査で、共同研究ということで教育学部さんとやらせていただいておるのと、あと大学ということではないんですが、一ボランティアということで留学生の方にボランティア登録いただいて、言語等の対応をしていただいているのがあります。

あと、多文化共生ではなくて国際理解ということなんですけれども、市内の小学校等の国際交流イベントがあるんですが、そういったところに留学生センターを通しまして留学生の方を派遣いただきまして、小学校でのイベントに協力いただいているということがあります。

あと、美濃加茂市さん等でやっております緊急支援ということなんですけれども、岐阜市につきましては中国の方が半分以上ということで、よく言われております日系人の方、ブラジル人の方ですと260名程度ということで、登録そのものが少ないのと、あと岐阜市に大きな製造業そのものがあまりありませんので、今回のその経済悪化という部分が、いろんな形の影響はもちろんあるんですけれども、直接という形ではありませんので、具体的な支援についてはちょっと市としては残念ながら今やっておりません。以上です。

【奥村和彦氏】 各務原国際協会としましては、先ほど新田さんの方から話がありましたけど、国際交流センターの支援事業の補助を受けまして、国際協会で語学支援というのを今やっています。ブラジル人学校の生徒とかあるいは一般の方を対象にした日本語講座みたいなのが語学

の支援ですね。

あと大学等の連携なんですが、これは今まで実際何もできていないような状況で、まだはっきりしたビジョンはないんですが、これをきっかけに地域の、岐阜大学さんとか岐女短さんとかそういうところとつながりを持って、これから進めていきたいなというのは思っておりますが、まずはやっぱり、とにかく多くの方にいろんな国のことを知っていただく機会を提供していただければありがたいなというふうに思っております。

【司　会】 ありがとうございました。ほかにご質問はございませんか。

【新田　豊氏】 すみません。一つだけ。

先ほど郡上の方から市の窓口に来たときの言葉の支援というのがちょっとございましたが、一応、岐阜県としては、先ほどの説明した国際交流センターに、英語、中国語、ポルトガル語対応の職員を配置しておりまして、それぞれの市で、例えばきょうお見えの岐阜市さん、各務原市さんは市独自で通訳さん、相談員さんを置いているんですけれども、置いていない地域の支援は国際交流センターですることとしておりますので、もしお困りのときは国際交流センターにお願いしたいと思います。ただ、通訳・翻訳会社の業務を妨害するような一民間企業の方の支援までは行政ができませんので、あくまでも県のセンターは市役所の翻訳・通訳とか、それからどうしても市がかかわらなきゃいけない地域の翻訳・通訳であれば相談に乗りますので、それ以外の企業の翻訳とか一個人的な趣味の翻訳というのはさすがにちょっとできませんので、よろしくお願いいたします。

【司　会】 どうもありがとうございました。

閉会の挨拶

岐阜大学　留学生センター長　　小　林　浩　二

ただいまご紹介いただきました岐阜大学留学生センター長の小林でございます。

本日は、年度末、学年末にもかかわらず、たくさんの人が私たちのフォーラムにご参加くださいまして、まことにありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

6人の先生方に発表していただきましたけれども、大変わかりやすく、内容も豊富で、大変よかったと思います。私も新たな知見をたくさん得ることができました。どうもありがとうございました。

先ほど古田先生もおっしゃいましたが、現在、私たち岐阜大学は、次期の中期目標、中期計画を作成中であります。そのなかで、「国際化」は大変重要な柱に位置づけられておりますが、中でも「大学の国際化への取り組みの成果を生かし、地域に貢献する」とうたわれており、地域への貢献、地域との連携が重要になっております。言うまでもなく、地域との連携というものを考えた場合には、その地域の資源ですね。人材とかも含めた、そうした地域資源をできるだけ利用することが最も重要だと思います。先ほど森田先生もおっしゃいましたけれども、地域密着型－郡上市や土岐市へのエクスカーション－はその一つであるでしょうし、新田先生初めブラジルについての言及がありましたが、ブラジル人をどういうふうに支えていくかが私たちの緊急の課題となっています。

いずれにしても、きょうの議論を踏まえて、私たちは今後、地域への貢献、地域との連携をどのように図っていくかを、考えていきたいと思っております。

本日のフォーラムですが、岐阜大学の「活性化経費」を利用して、私たち留学生センターが企画いたしました。今後、本日の成果を踏まえまして、さらにきょうの議論を深めて、地域の連携を含めた国際化の進展に努力していきたいと思っております。

きょうは本当に長い間、ありがとうございました。これでフォーラムを閉会させていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

岐阜大学留学生センター・フォーラム

岐阜地域の国際化戦略
－大学と自治体の連携の可能性－
報告書

発行
平成21年3月
岐阜大学留学生センター
岐阜市柳戸１番１

GIFU UNIVERSITY INTERNATIONAL STUDENT CENTER